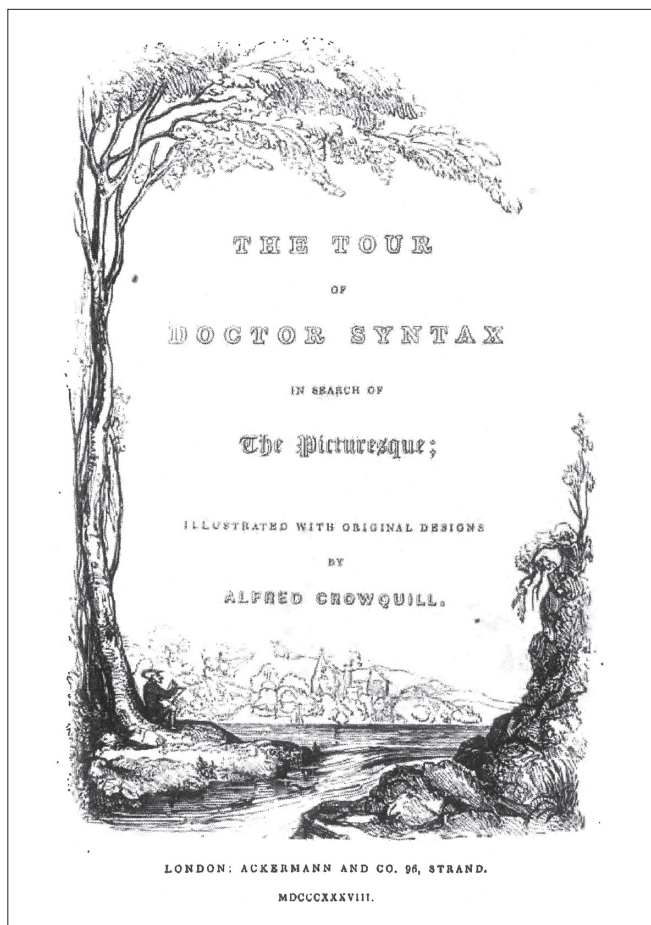


シンタックス博士のピクチャレスク旅行

II. 第十二曲から第二十一曲まで

著者 ウィリアム・クーム

訳 江崎 義彦



目次

	(ページ)	(本論集ページ)
第十二曲	(2)	238
第十三曲	(14)	250
第十四曲	(25)	261
第十五曲	(37)	273
第十六曲	(48)	284
第十七曲	(60)	296
第十八曲	(71)	307
第十九曲	(81)	317
第二十曲	(97)	333
第二十一曲	(110)	346

第十二曲

人生は 一つの旅にして 我ら
 喜怒哀楽の あまたの谷間を 通り行く。
 光陰は矢のごとく 立ち止まることもなく
 途上なる我ら 振りさけ見ること能わず。
 また 例うれば 人生は一つの流れなり その変化に富む水路は 5
 激流となって突進するかと見るや ある時は
 繰り返し沸き立つ渦を立て 戯れては
 迷宮さながらに 優しく彷徨う。
 そうして 流れ流れて 幅を広げながら
 遂には 大海原に合流する。 10
 そうして 海の怒号と出会うとき
 透明な波はもはや 見られ得ず。
 然り！ 不確かなり かくの如き人生は。

今や 太陽が一日を活気づけ
周囲の景色が 目を楽しませる。 15
木陰は 涼しき憩いを招き寄せ
花々は 馨^{かぐわ}しき香りを解き放つ。
牧場は緑したたる絨毯^{じゅうたん}を広げ
足下を見れば 澄んだ流れが
縁に育つ花々を映し出し 20
森の小鳥たちは 甘い歌声で
合唱しては 調和と愛を歌い上げる。
しかし 見よ。雲が大空を陰らし
弾ける嵐の 近きを告げる。
激しい稲妻と 襲い掛かる嵐が 25
美しい自然の上品さを すべて汚してしまい
激烈な力でもって かき乱してしまう—
巡礼者の沈思の際の 静かな喜びを。
そうして 巡礼者が休らう筈の東屋を
嵐こそ 悩^{なや}ましはしないのに 今度は 30
悩^{なや}みが沸き出て 彼をそこに滞在させず
再び 旅へと 駆り立てる。

こうして 郷土ハーティが まる3ヶ月は
滞在休暇を要請したはずの そのシntax博士は
あと一日と言えど 彼の世話になり 35
長居をすることが出来ないと分かって 深い吐息をついた。
「いいえ」彼は言う。「私は旅立たなければならないのです。
「壮大な書物を書かなければならないし
「旅の手筈を整え 湖を描かなければならない。
「十分に計画を練った一大書物で 40
「名声と財産を 運び帰らなければならない。

「もし 私がそれに失敗すれば 愛する妻も

「とても結構な人生を 私に与えて

「扉を閉ざしては 私を締め出すだろう

「そして ただ それしか考えつかないでしょうよ。」

45

かように 彼は横たわっては 瞑想していたとき

太陽は 別の一日の開始を告げていた。

もはや 柔らかなベッドに身体を憩わせること能わず

妖しき思いが その休息を掻き乱す。

心には感謝の気持ちを抱きつつ この熱き館から

50

素早く旅立つ気持ちを 募らせた。

そうして 郷土は 真心こめた告白調で

直ちに告別の言葉を語った 優しげに。

郷土

「博士 心底残念でございます 私とあなたが

「こんなにも早く お別れしなければならないことが。

55

「あなたの高貴なお心は 私の尊敬の思いを高めます。

「私は 気高いお方には 敬意を払う者であります。

「そして 真夜中にランプを点してまで

「学問の道に勤しむ心を持つ者ではないのですが

「それでも あなた様のような学識のあるお方すべてには

60

「深い尊敬の念を抱く者であります。

「そして 学問があなたを遠い彼方へと誘いかけている今

「これ以上 ここにお引き止めすることを言い張る訳でもありません。

「しかし あなたは 詩の女神への私の率直なる貢ぎ物を

「お断りにはなれないと希望いたします。

65

「そうして あなたがこちらへいらした場合には

「また この館を ご自宅だと受けとめて頂きたい。

「更に言えば あなたのご労苦の結集を 人格においても

「また 学識においても 高い階級の人々に
「よく知られた ある高貴な友人に 70
「推奨する意図もあることを 告白しておきます。
「彼こそは あなた様の真価を十分評価できる人物であり
「政治家であると同時に 詩人でもあります。
「彼こそ あなたの天分を真に理解できる者ですし
「貴族でありながら 学識深い人物ですから。 75
「というのも C _____¹ は、誉れ高い名前であり
「その美德と穢れなき名声こそは
「歴史的な書物のページを飾るものでありますし
「未来永劫に渡って 生き続けるでしょう。
「その懇勤な閣下は この私めをも 80
「友人として認めて下さる 謙虚なお方なのです。
「従って、私が今手渡しますお手紙を あなたが
「閣下にお渡しになれば
「まさに高貴なお人柄のままに きっとあなたのお心を
「活気づけてくださるような 歓迎の意を示されると考えます。 85
「 _____² へと、お急ぎください。
「そうすれば あそこであなた様に名誉が付き従うでしょう。
「どうか 上流階級の威厳が あなたの慎ましい運命に
「^{しか} 響め顔を差し向けるなどということ ご心配なされぬよう。
「閣下は 偉大な人であり 同時に善良なお方ですから。」 90

シントックス

「おお あなたのご親切は 果てるところを知りませんね。

¹ 原文は、C・・・・と略記されており、ここではそのまま「C _____」としている。これは明らかに、作者自身、即ち“William Combe”が仄めかされていることは間違いないだろう。以下、数箇所同じ表記があるが、事情は同じである。

² 原文では、ここは空白のままである。

「本当に持つべきは 親友であると思ひ知ります。
「同時に 口下手なこの私は どうしても
「この予期せぬ幸福を 表現することも出来ない始末です。
「というのも その気高い閣下が かたじけなくも 95
「温和な そして保護して下さるような賞賛のお気持ちで
「私を元気づけ また壮麗な愛情の光でもって
「私のか弱い労働を 支えて下さるとしたら
「それこそ 私の幸運と財産が達成される証しとなるからですし また
「私が著者としての仕事を 喜んで進めることが出来ることになるからです。」100

彼がこう話している時に 郷土ハーティは
シntax博士が待ち望む手紙を 手渡した。
おまけに 石炭色の二文字がその上に書かれている
柔らかな肌触りの良い紙切れを 手渡した。
それを見るや否や 博士の感覚は狼狽してしまった 105
そこに書かれていた二文字とは 他でもない**20ポンド**なる文字³であった。
郷土は言った。「あなたの驚きの視線を抑えてください。
「これは あなたの書物への ささやかな献金です。
「そして その書物が出版されたあかつきには
「どうか このヨークシャーの友人にも 一冊お送りくださるように。 110
「更には その書物 我が近隣の友人たちにも
「20冊かそこら 売って差し上げましょう。」

博士の口は 返事することさえできず
ただただ 感謝溢れる溜息を漏らすことが出来るだけであった。
そして 座りこけながら 約束の手紙を 115
繰り返し読むより良いことは 何もなかった。

³ この「2文字」とは、言うまでもなく“Twenty Pounds”という2文字のこと。

.....

親愛なる閣下

どうぞ このお手紙

笑止千万とお受けとめてください。

この手紙を携えた方が あなたの美しい館へと

お姿を現されるとき この方のお姿は 120

きっとあなた様のお気持ちを活気づけてくださるでしょう。

あなたは 他のどんな話題も必要なくなります

この方が 一週間分のお笑いを提供なさる筈です。

しかし もう少し真実のことを申しますならば 必ずやあなた様は

このお方をそのご品格ゆえに愛されることでしょう。 125

そして 直ちに この神聖なお方のなかに ご覧になるでしょう

キホーテのような 牧師様のような アダムのような輝きを。

フィールディングとセルバンテス両方に相応しい

複合的な英雄⁴を ご覧になるやもしれません。

更には 私が判断します限り 閣下 130

この方は 古典の知を熱心に追求されるお方です。

おお ただこの方の素朴な物語=身の上話を お聞きください。

その話のすべてを あなたの前でお話しなるでしょう。

そうして きっとあなた様は この私の手紙に感謝され

このハーティーに恩義を被っていると仰ることになるでしょう。 135

いいえ あなたの横腹が 歓楽で疲れるような時にも

あなたの心臓は この方の真価を感じられることと思います。

優しいお心でもって この方をお受けになることを信じますがゆえに

すべて あなた様のご高配に この方をお任せする所存でございます。

⁴ ここは、恐らく、Fieldingの“Tom Jones”とCervantesの“Don Quixote”の二人が組み合わされて一人となった「複合的英雄」だということ。

こうして 熱烈なる思いをお伝えし 140
閣下の真の忠実なる下僕であることをここに記して。

R. ハーティ

木曜日
ヨークにて

.....

博士は 今や 旅立ちの準備が出来た
心は勇み立ち 顔には悲哀の色を浮かべて。
彼は 静かに郷土の手を摘まみ
奥方の指令を乞い求めた。 145

郷土は叫ぶ。「なぜ そんなにもグズグズなさるか。
「奥方は 心からなるキスをお受けいただくよう 切望しています。
「もし一回のキスでご満足いただけないとしたら
「彼女に2度のキスをお与えになっていただけませんか。
シntaxは言う。「いいや ご覧あれ」と言って 150

直ちに 奥方に3度のキスを与えた。
また同時に 次のような宣言をも直ちに付け加えた。
「奥方よりもお美しい貴婦人にキスしたことなどなかった」と。
奥方は 頬を赤らめ 彼に感謝の意を伝え
静かなる口調で こう言った。「御機嫌よう。」 155

シntaxは 最初に家を離れて以来 今ほどに
希望溢れる未来への 見通しを持ったことはなかった
様々な空想が沸き上がるのだが すべて 未来の悲しみは
笑って飛ばせと 言い聞かせてもいたのだった。
「^{フォーチュン}運命の女神よ。」彼は叫ぶ。「汝は、遂に私に優しくしてくれる。 160
「汝の過去の悪意を 私は忘れて進ぜよう。」

「C _____⁵なる者の慈悲深い形体にくるまれて
「汝の力をもってしても 嵐を目覚ますことはないだろうし
「二度と再び 私の頭上に 頻繁なる驟雨となって
「その怒りを 降り注がせることもないであろう。」

165

そうして 熱烈な願いを抱き 誇らしげな想像をして
朝のうちに 少しばかりの旅をしたあとで
博士は 美しい _____⁶の壮麗な建築物をみて
意識的に 大きな微笑みを浮かべた。

ヴェルサイユ宮殿でさえも かくなる美しき外観は見せない。
そうして 小高い急坂を通過する際に
脚下に見えてくるは 堂々とした光景なり。

170

閣下^{My Lord}が 優雅なる仕草で 博士を迎え入れるのだが
まさに その土地の君主とも思わせる仕草であった。
また 哀れなシntaxは 慎ましい功德ある人が
己れの前に立っているときに 美しき礼儀作法だと
考えて 馬鹿者どもがしばしば表わす質の
高慢ちきな態度を 意識するということもなかった。

175

ここにあるは 愚行からは程遠い生まれのものたちであり
ここにあるは 真実の気高さであった。

180

ここでは 美德のなかで最初のもの そして
最善のものである 人間的な優しさが 鶏冠^{とさか}を飾っていたのだ。

愉快なるおしゃべりで1時間が経過すると
歓迎の宴が 遂に開かれることになった。

⁵ 前にも出てきたように、原文では“C・・・・”となっているので、そのままにしておいた。

⁶ 原文では、ここは空白になっている。

今や 飢えたるシントックスは 味なラグー⁷と 185
高級な肉にあずかる時なのだ。

また、善良な人達ばかりで 飲み物を求められて
身体で断りを示す者さえ いなかった。

閣下

「博士よ あなたの周囲に輝いている絵画を見て
「何を思われるか？」 190

シントックス

「そのうち それら豪華な絵画は 楽しみましょう。
「今は 閣下 私はむしろ何かを口にしたいと願います。」

閣下

「ここにある彫像を どう思われるかな。
「まるで 生身そのままという感じがしませんか？」

シントックス

「閣下 それが素晴らしい作品であること 私も確信します 195
「が 今は 閣下のワインを好むものであります。」

ジョン卿

「私には あなたが 自然と競う形体から
「決して目をそらされないことを 驚異に思います。
「いいえ 私の心の中では 敬虔なる友よ
「それらは自然の最高の作品よりも 遥かに優っています。 200

⁷ 原文は“ragouts”とある。“ragout”：[フランス料理] ラグー、煮込み。薬味を利かせた濃い味付けの肉・魚肉のシチュウ（『ランダムハウス英和』）

平・グレイシズ

「三美神のあの絵をご覧なさい

「何と愛らしい形体 何と魅惑的な顔なのでしょう。」

シントックス

「ジョン卿よ 彼女たちの魅力は

「夕餉が終われば 疑いもなく 理解できるでしょう。

「目下は もし私に判断ができるのであれば

205

「最も美しい作品は テーブルの上にあります。

「今は 私には 料理人のほうが

「ルーベンスやジェラルド・ダウ⁸より 好ましく思われます。」

閣下

「私は ある確かな規則にのっとって

「フランドル派とイタリヤ派を 判断した。

210

「そして それぞれの派が受け継いでいる長所

「或いは美点を うまく描写してみたいわけです。」

シントックス

「両派ともに それぞれ魅惑的な芸術ではありましようが

「今は 私は 閣下の台所の方に より興味があります。」

正餐が準備され 葡萄酒が現れ

215

多くのグラスが 彼らの気持ちを掻き立てる。

お祭りのひと時は このようにして過ぎ

時間の神が 終止符となる時を告げる。

⁸ 原文では“Gerard Dow”となっている。正確には“Gerand Dow”か。辞書にあたってみると次のようにある。「Dou, Dow, Douw: 名ダウ< Gerrit [Grand] ~ m 1613-75; オランダの画家; レンブラントに師事) (『研究社 新英和』)

博士はおしゃべりを続け また痛飲を続けると
周囲の者たちは 笑いこけて気が滅入るほどだった。

220

閣下

「再び 主題に戻りますかな。
「あなたに 絵画を見て欲しいと思うものです。」

シンタックス

「それらを鑑賞することは 今は 気が進みませんね。
「本当のところ 私は物がダブって見えるのです 閣下。」

閣下

「ならば 寝室へと急ぐのが最善かなと。
「執事に あなたのお世話を任せましょう。
「賢く 慎重な男でありまして あなたの仰ること
「いかなることでも 聞いて差し上げることでしょう。」

225

その賢く 慎重な男が姿を現し 会釈する。

「私は この立派な務めを誇りに思うものであります
「しかし このお屋敷の習慣では
「田舎の郷土から 彼の奥方に至るまで
「見知らぬ人が客人になれるときはいつでも
「酒蔵を開放することが ^{しきたり}習慣となっていました
「あなた様にも 同じ敬意を表したく思う次第であります。
「従って 私めがそちらへのご案内致しましょう。
「酒蔵では 気高い大樽の一つ一つが 我先にと
「名のあるお方への尊敬の念を示したく ウズウズしています。」

230

235

召使いたちが 階段で待っている。

注意深い姿勢をとり また恭しい態度を示しながら。 240

「ご案内ください」シントックスは言う。「ここでグズグズするより
「直ちに あなた方のご案内に 着いて参ります。」

執事は ここで叫びだす。「お前たち 分かっているだろうな。
「この尊師様 この博士に 私たちの最も強いビールの
「サンプルを 試飲していただくことを— 245
「それが 我らの偉大なる閣下のご命令であることを。
「さあ デボンシャー産のこの恵みの栓を抜きたまへ。」

遂に 夥しい液体が 溢れ出す
そして 哀れな男に その悲哀を忘れさす。
シントックスは叫ぶ。「さあ 閣下に乾杯だ！ 250
「気高さこの上ないご主人様のご健康に 乾杯。
「そして このデボン・ビールに 乾杯の音頭を取らせよう。」

酒盃は 歌声とともに 威勢良く高く掲げられた。
しかし かくなる乾杯は 長く続くものでもなかった。
そしてシントックスは 吃りながら言う。「お分かりかな。 255



「この名高い酒蔵を 自由に堪能させて頂いたからには

「今度は 寝室での自由を堪能させて頂くべく

「直ちに ご案内下さるよう 切に願う次第です。」

彼はただ一度そう懇願しただけであるが 直ちに聞き入れられ
すぐに ベッドに横たわる身となっていた。

260

そこでは 一日の奇妙な出来事も荷を降ろして

今や 彼はただ独りきり 高いびきをかきながら寝込んでしまった。

第十三曲

我ら 人生の谷間を彷徨うときにも
いかに ^{ファンシー}空想が 道中で 我らの道を照らしてくれることぞ。

幾多の麗しい幻を引き連れて いかに

空想は 我らの迷える心を 喜ばしてくれることか。

そうして 優しい 精彩のある ^{ほほえ}微笑みでもって

5

重々しい 悩みある時間を 紛らしてくれることか。

彼女は 我らの目覚めを より華やかにするために

花々を撒き散らす数は 多いのだけれど

夜こそは 我らの魂を

彼女が完全に支配する時である。

10

夜には 生の活発なる機能が躊躇して

眠りが その黒いカーテンをば 引き下ろす。

その時である。空想が 妖精の杖を振り

不可思議な物たちが 彼女の意のままに立ち現れるのは。

それから 彼女はまだら服のような衣装を装い

15

人間は 再び 己れの生を生き始める。

他方 数尽きない夢が 彼女の魔法の仮面と

いたずら好きの霊たちを 招き寄せる。

熱き脳みそを通して 今度は 亡霊たちが戯れ
幻視の一日を 織り成すのだ。 20

かく シントックスは ベッドに身を横たえながら
馨しい憩いのうちに その夜を過ごした。
そして かくなる無意識の時間帯には
空想によって その美しい幻の東屋へと導かれたのだが
そこは 陽気な妖精たちが 自由に彷徨っていて 25
気ままに 変化に富んだ舞踏を踊っていた。

もはや 慎ましい副牧師などでなく
彼は 己れの額に 宝冠を冠っているのを感じた。
白カビが生えたような白衣が 引き下ろされ
美しい透明な芝生へと 垂れ下がった。 30

いかなる天候ものともしない鬢^{かつら}が
羽毛かと思うばかりに 繊細に身に着けられていた。
グリズルも もはや 切られた耳と
台無しにされた尻尾を 嘆く様子は見られず
今や 六頭のグリズルが すべて立派な耳を持ち 35
流れるような尻尾を振って 姿を現すのだ。

そして 軽いバルーシュ馬車⁹に繋がれて
彼らは 地面に足を付けているとさえ思えない。
他方 荒々しい驚きの渦巻きに包まれながら
風に運ばれる^{フレイトイット}高位聖職者となって飛んでいる自分を 感じていた。 40
そうして 今度は 長い大聖堂の側廊で
堂守が額づき 乙女達が微笑むなか

⁹ 原文は“barouche”とある。「バルーシュ型馬車<通例2頭立て4人乗り4輪馬車で半ば
ろ付き>」(『ジーニアス英和』)

リズムに合わせた足取りと 厳かなる雰^ま囲気を纏^まって
遂に 彼は かの聖なる椅子へと到着する。
そうして 深遠な視線を向けて 群れ集う者たちへと

45



聖なる祝福の言葉を 撒き散らす。

頭上では オルガンが鳴り響き

下方の合唱隊へと音楽を届けている。

そんな時 宗教の聖なる奥御殿に 頭を下げながら

博士は 神聖な活力が沸いてくるのを意識する。

50

そして 今や 妻なるドリーの怒り狂う抱擁から逃れて

ある公爵夫人と結ばれていると思うのだった。

そして 彼女の高い地位と燃え輝く美しさが

己れの僧職者としての努めを生かしてくれるのだ とも。

このように 空想は その古風な従者を引き連れて

55

博士の脳みそのなかを 迅速に通りゆく。

しかし、彼女が 東の間の栄華と

褪せゆく栄光の 多彩な物語を語っているときに

一つの声が その幻視の世界を打ち砕く。
シントックスは不満の声を発しながら 目を覚ました。 60

「お加減はいかがですか。博士様に 私の閣下から
「ご伝言でございますが よろしいでしょうか。」
「閣下ですと。」彼は叫ぶ。「言うまでもなく かくも自由に過ごし
「私こそ 閣下的な身分でございました。
「夜中じゅう 私は 威厳を持ったあらゆる貴族と同じく 65
「偉大なる人物として 過ごさせて頂きました。

「しかし 今は その美しく描かれた舞台にも幕が下ろされて
「以前と同じような 哀れなシントックスに戻ったところです。
「あなたが その幕を下ろしたまさにその瞬間に
「あなたが 私の幸運を台無しにしたことは 確かですぞ。 70

「でも お嬢さん もしよければ 教えてください
「閣下が 私に何をお知らせになりたいのか を。」
「閣下が私を遣わされたのは あなた様に
「階下では 朝食の準備が整ったと お知らせするようにとのことです。」
「閣下には 常に私の尊敬の気持ちが離れないのでありますし 75

「直ちに 降りてゆき 閣下と一緒に とお告げください。」
博士は 床のうえを 弾むような足取りで 飛んでいった。
そのメイドは 大声で叫んで 扉を通り抜けた
そのようにも 博士の姿形は
衣装も身につけない状態だったので 彼女には衝撃だったのだ。 80

シントックスは 今 大急ぎで降りてゆき
一日の早朝の召喚に 従うことになる。
彼は恭しく頭を垂れ 座席を占めた。
同時に 閣下のほうも 優しさこの上ない言葉で
敬虔なる客人に 挨拶するのを忘れない。 85

例えば どのように憩いを楽しまれたのか
また お望みの安楽を すべて取れましたかと。
また 昨夜は十分安らかに眠れましたか
また 私は あなたとの朝の食事を共にすることを
とても 熱望していて 準備も整っていますよ と。 90
博士は微笑み すぐに 閣下のおもてなしに
心おきなく 与ることになった。
そのうちに 博士は 己れが見た黄金の夢を語ったが
それは 笑いさざめきの 格好の主題となった。
博士は言った。「真実を言えば 私が目を覚ましたとき 95
「魅惑のすべては解体し 呪文も解けてしまいました。
「宝冠も その壮麗な見世物も
「美しい妻と一緒に すべて消え失せてしまいました。
「私を目覚ます声が 私の幸運に影を射し
「目を開けたところ 全てがなくなっていました。 100
「しかし 有難いことに 今尚
「この食欲だけは 失せていないのです。」

ジョン卿

「空想が あなたの目の前に突きつけた
「宝冠と黄金に関して言いますならば
「学識溢れた人にとっては 105
「一顧だに値しない代物だという気がしますが
「ただ そんなに美しい花嫁が あなたの傍らから
「奪い去られるということについては ただ 嘆き悲しむばかりです。」

シンタックス

「その美しい花嫁を求めてさすらう事はよしましよ
「ジョン卿よ 私は 里に妻を持っており 110

「彼女は 朝から夜まで 家庭を精彩あるものとして
「維持するために 精を尽くしているわけですから。
「そんなにも活発な処理を出来ますがゆえに
「妻が目覚めているときは 眠るものなど誰もいないのです。
「私にとって もし^{フォーチュン}運命の女神が ただ その富と 115
「力さえ 分け与えてくれるのならば
「誓ってもいいのですが 女神を許してあげましょう
「尤も 彼女はもうひとりの妻を加えるのを忘れましたが。
「実際に ジョン卿よ 我々の哲学に関しては
「二人は 意見の一致はないし また共有もしないでしょうね。 120
「と言いますのも 多分 あなたはご存知ない
「毎日 沢山の侮辱を受ける男が 一体何を知っているのかを。
「彼は その頭を櫛で解かれ そのポケットはいつも空っぽで
「あなたをご存知ないような 身を切られる悲しみを 感じているのです。
「あなたは それら輝く物たちを クズとは呼ばないでしよいうね 125
「それが触れるものこそ生命であり、その名前は<^{キャッシュ}現ナマ>なのです。」

閣下

「あなたのご意見は 申し訳ないのですが 中斷させて下さい。
「外では 狩人たちが 今か今かと 待っています。
「私の 物知り事務官が
「私の敷地を 馬で案内してくれる筈です。」 130

シントックス

「閣下 今のところは あなたの^{ゲーム}狩猟には ついて行けません。
「私は 湖水地方へ行って 湖を狩らねばならないのです。
「あなたが 疾走する鹿を追いかけている間
「私は ウィンダミアへと 飛んでゆかなければなりません。
「狐に声をかける代わりに 135

「私は 岩から放たれる餅を捉えねばなりません。
「好奇心溢れる目を光らせ 活発に臭覚を働かせて
「私は ピクチャレスクなものに専心します。
「これが私の狩獵^{ゲーム}です。それを追求しなければと考
「見えないものでも 見えるようにしなければなりません。 140
「それが まさに私の真実 どうぞお笑いになりませぬよう。
「常に そのような目標を背負っている私です。
「もし ある人間の姿のなかに あなたが
「ピクチャレスクなものをお望みならば どうぞ私をご覧下さい。
「私こそ 欠陥も何もない 145
「私の描くピクチャレスクそのものなのです。
「また その顔が艶やかな牧師^{レクター}になかに
「あなたが 皺の一つ探そうとしても 無駄でしょう。
「そのようにも太っていて 丸々とした美しい形姿のなかに
「いかなる鈍角の線も 見いだせません。 150
「そのような形姿に関しては どのような趣味^{テイスト}の人も
「優れた色彩とキャンバスを 浪費したいとは思わないでしょう。
「しかし 非常に細身の副祭司^{キュレイト}を取り上げてみましょう—
「その骨が 皮膚を通して覗き見しているような彼を。
「そして 彼を あなたが相応しいと思う姿勢のままに 155
「立たせ 歩かせ そして座らせてみなさい。
「そうすれば 彼の雰囲気は美点だらけとなり
「よく教育をされた画家ならば 誰も彼を軽んじることなどしないでしよう。
「彼は その物腰と 視線と 雰囲気でもって
「いかなる光景にも 一つの効果を与える筈です。 160
「私と等しく 哀れな獣に過ぎない我が愛馬のなかに
「一つの優れた見本を あなたはご覧になるはずです。
「彼女は あらゆる点で 無骨でぶっきらぼうですが
「おお 美術にとっては 何と素晴らしい恰好の主題でしょう。

「こうして こうして 私たちは 一緒に旅をしているのです 165
「優しい微風に吹かれて また嵐に突き動かされながら。
「そうして 死のような水平面のみが 延々と支配する
「大平原を 小走りして進んだり
「また その頭を持ち上げて 大空に挑みかかるような
「岩や山々が聳え立つところを ゆっくりと歩いたりしながら。 170
「私 ドクター・シntaxと 我が愛馬は
「風景に二重の力を与えるものです。
「疑いもなく 私は 並ぶもののないほどに有益な
「一冊の書物を 生み出す筈です。
「それは ^{テキスト} 趣味のある人々の目の下に 175
「置かれて然るべき 価値のある書物となることでしょう。
「そして 願うべきは 閣下 あなたに それを
「褒めたたえて頂き 保護して頂くということでもあります。
「そして あなたの申し分なき高名なお名前が
「二人分の後援者として世間様に知られますように。 180
「時が終わる時まで 時間がいつも C _____ こそ
「私の名誉ある友人であったと知ることができますように。」

ジョン卿

「では 学識豊かな博士よ その大事な時が
「いつになるのか お分かりになるのですね。」

シntax

「騎士殿よ それは賢いご質問とは思われませんね。 185
「その点は 冗談では済まされない重要な点なのです。
「**神**の戒律によって あなたは知らねばならないでしょう
「**時間**とは あなたにも私にも訪れるものでして
「そして永続するという事 すなわち永遠だということ。」

閣下

「静かになさい ジョン卿よ そして 博士には 190
「万事がうまく行くことを願っていると伝えたい。
「私が確信していることは 博士の作品は 結局は
「私が愛する諸芸術にとって 最も有益なものとなるということです。
「でも 博士 どうか 町へいらっしやい。
「富と名声の座へ。 195
「町へいらっしやい そしてお金のことは気にされませぬよう。
「一刻の猶予もありません お悩みになる必要もありません。
「私が扉を開けて あなたを中に入れて差し上げます。
「あなたは 私を笑わせました あなたの勝ちです。
「さあ 二人で どうしたら私が あなたの心からの 200
「関心事を推し進めることが出来るのか ご相談いたしましょう。
「そして さあ この書き物を受け取りなさい。
「寄贈者のために思い どうぞご利用下さい。
「つまり こういうことです。あなたが町に滞在しているあいだ
「これが あなたの願いに飾りをつけてくれるでしょう。 205
「ただし あなたのご都合に合わせて お使いください。
「思うに 誰もそれを拒みはしないでしょう。」
博士は その紙を見たときに
お辞儀をするのではなく 小躍りして喜んだ。
閣下は 今や 待ち望んだ狩猟に出かけた。 210
シンタックスは いつもの速度で進み
四日もの退屈な日々を費やしたあと
遂にケジックの町に到着する。
そこで 彼のあらゆる苦心の結晶である作品一
望んだ報酬となるべき名高い作品の準備をした 215



朝が明けると思うや否や

老いたグリズルは 彼を湖水へと運んで行った。

土手に沿って 彼は厳肅なる気分で進み

その地が展開する様々な美を追いかけた。

すると見よ。威嚇するような嵐がやって来て

220

フィーバスも その光景を活気づけるのを止めた。

黒い雲が すべての丘を 暗く閉ざし

霧が漂っては 谷間に充満した。

自然は かく変形されて 低く垂れ込め始め

激しい驟雨の予感さえ 与えた。

225

「私は 好きだね」彼は言う。「四元素が戦いをして

「争いあう その騒音が。

「というのも これを描写し また描写しながら

「ある者は馬鹿にするかもしれないが 私は主張したい—

「我らは 大きな雷鳴のなかに 音を立てる風のなかに

230

「ピクチャレスクなるものを見出すことができるのだと。

「そうして しばしば 十分想像できると思うが
「ピクチャレスクは 見られもし また聞かれもするのだ。
「なぜならば 絵筆は ある場所を描くようには
「音を描くことは出来ないけれど 235
「ペンは 詩的激情¹⁰の中においては
「ページの上に その姿を表現することも出来るからだ。」

その時に その場所を通りかかった釣り師が
次のように言うのが 礼儀だと考えて こう言った。
「旦那 ご忠告ですが こんな雨のなか 240
「眺望を楽しもうなんて 無駄ですぜ。
「馬に乗っていても そんなこと 出来っこありません。
「テーブルについた方が 遥かに良いことですぜ。」
「ご忠告 有難う」シンタックスは言った。
「本当に すぐにそうするとしよう。 245
「なにせ 私は皮膚のなかまで湿ってしまい
「旅籠のテーブルが 何よりと考える。」
しかし グリズルは 誘惑的な草むらに誘われて
性急に その場を通り過ぎたい一心で
今や 不運な道を歩む羽目になり 250
博士を 湖の水で塗らすこととなった。
しかし 実際のところ 彼ら両者が十分に耐えられる
そんな災難が グリズルと師匠には
降りかかったただけであり
暖かい旅籠が すぐに 両者を癒すこととなる。 255
大急ぎで 両者は その暖かい旅籠へと向かい

¹⁰ 原文は“poetic rage”。プラトンの「聖なる狂気 (divine madness)」「詩的情熱 (furor poeticus)」を暗示している。

そこで シntaxは 暖炉のそばで
家主の衣装にくるまって 座を占めた。
しかし 悲哀に沈むのでもなく 憂鬱に浸るわけでもなく
また そこで己れの時間を無駄に消費した訳でもなしに
己れの絵筆に 思うまま活動させ
その日に見た風景のあとを辿ったのであった。

260



第十四曲

自然は 愛しい自然は 我が女神なり
田舎びた衣装に 身を包むときも
また 芸術の上品なる筆触が
彼女の魅惑に 更なる魅惑を与えるときも。
しかし それでも 彼女がそれらよりも粗い^{ルード}衣服を
身につけるとき それが私の最も愛する自然である。
私は 彼女がグロテスクなものに身を包む時と言うのではなく

5

彼女が 真に ピクチャレスクなときに と言いたいのだ。

こうして 次の朝 彼はあたりを散策し
周囲の光景を 調査した。 10

その時に シンタックスが叫んだことに 湖水の
まさに端っこに ある一行が立っていた。
彼女らは まさに 湖水への短い航海をする
そのような現場にいたのだった。

博士は 前に進み出て 己れの画集カバンの
その財宝を 彼女らに見せた。 15

婦人たちは 彼が描いた美しい絵画を見て
非常に喜んだ。そうする間に
近隣のある若い小姓が
非常に熱い思いで 一つの願いを表明したが 20
それは正直な心から出てきたと思われる願いだった。
「あなたがたの船に 私も乗船させてくれませんか」と。

こうして一行は 急いで岸辺から離れて行った。
やがて博士の声が 一同を支配した。
「これこそ まさに愛らしい自然の光景だね。 25

「でも 私は もう陸と水は 十分に味わったよ。
「私は ピクチャレスクなるものが いかに関に立つものであるか
「何か生き物が 私に 示してくれたらと願っているんだ。」

婦人の一人

「ご覧あそばせ おじ様 何と速い動きで 燕が飛んでいることでしょう。
「そして 雲雀もまた 大空高く 舞い上がっていますわよ。 30
「大空が高くて もう殆ど目に見えないくらい・・・
「あの水鳥たちをご覧なさい。湖水の豊かに広がるベッドの上で

「なんと言う美しさを描いて 広がっていますことか。

「そして^{とび}鳶は 空中を航海しながら

「獲物に襲いかかる準備を整えていますわ。

35

「それに ミヤマガラスもまた 朝の食事を終えて

「遠くの森の中へと カーカーと鳴いて 姿を消して行きます・・・」

シntax

^{フィロソフィック・アイ}
「哲学的な目を持って 私が

「自然の領域を見渡しながら

「様々な形ある生き物すべてに

40

「彼女が付与している気品を見るときに

「空を駆け回り 大地を匍い進み 海原を泳ぐ者たちすべてに

「そのような不可思議な力を与える

「自然の持つ^{プラスチック・アート}造形的な技を

「私は 畏怖の念を抱かずには 感じることは出来ない。

45

「私は 大空の薄い水色の世界を

「飛び回る 翼ある者たちを愛している。

「或いは かような高みに挑むことを許されずに

「大地の人間たちの親しい友として

「庭やら 小屋の周りで 割り当てられた運命を

50

「ひたすら楽しむ 哀れな鳥たちをも 私は愛している。

「しかしだ！ 彼らの羽毛は華やかに彩色されているけれど

「そして 果てしない変化をみせて輝いてはいるけれど

「それって一体なのだ。誇り高い孔雀が その尾を広げるとき

「目を眩ませるような光輝く色彩が溢れるけれど それが何なのか。

55

「また 魅惑された夜を通して ^{ナイトインゲル}小夜啼鳥が

「誘惑するような歌を長引かせるとしても

「また ^{ブチャクホード ステラッシュ}黒鳥と鶇が 新緑に覆われた藪を ことごとく

「音楽で溢れさせるとしても それらが何なのだろう。

- 「羽根をもつ種族のなかの いかなる鳥も 60
「私の心にたいして 一つの< ^{オブジェクト}物 >も提示してくれはしない。
「彼らの上品さも美でさえも 私には< ^{ナッシング}無 >なのです。
「つまり 様々な変化に富んでいるにもかかわらず
「彼らの中には ピクチャレスクなものを 発見できないのです。
「杭に繋がれて 腐肉を漁る家禽が 65
「^{かかし}鞍山子のように ^{ぬすっと}あらゆる盗人鳥を恐れさせるために
「そこに姿を展示されているときは
「水晶のように澄んだ湖水を 華麗な姿をして
「航海する白い白鳥よりも
「遥かに美しい絵画を産み出すことでしょう。 70
「哲学者として 私は ^{ヘヴン}優しい神が
「人間のためにお作りになったものならば何でも 調べてみる積りです。
「そして その効用を祝福し その美を称えること
「それを 私は 私に課せられた宗教的な義務だと受け止めます。
「その生き物が何であれ その名前が何であれ 75
「また その姿と容貌がどのようなものであれ 気にはなりません。
「慈しみ深き自然の女神が それらの生き物は
「<私のものである>と 宣言なさろうからであります。
「しかしながら 猟銃犬の姿や 蛇の衣裳など
「私も 賞賛する者であることには違いありませんが 80
「彼らは両者ともに 毛むくじらの ボロ着を着たような
「野獣と同じように 私の目的には合致していません。
「私は ^{グーエス}ガチョウも 美しい鳥であり
「気高い役に仕えるものと 認めるに^{やぶさ}吝かではないのですが
「しかし 絵画に^{ふさわ}相応しい鳥だとは思いませんね。 85
「この鳥は ただ唾を吐きかけられるためにのみ 創造されたのです。
「^{ビジョン}鳩はどうかと言えば 私は そのことを示す義務を感じていますが
「詩人にとっては 素晴らしい主題であると言えるでしょう。

「柔らかな詩でもって 彼は仲間^にに求愛し
「華やかな首と嘴を向けては クーと啼き 90
「そして 恋する歩みで動き回るとき
「彼は 愛する者たちの 優しい心を慰める。
「しかし 私は彼を描く気にはならない 決してこの私は。
「私は パイの中にいる彼のほうが 好きですな。
「塩と香りのよい香料とが 上手に^{こす}擦りつけられ 95
「パン皮に このように包み込まれた姿の方が。
「なる程 森を訪れる いかにも多くの小鳥たちが
「また 湖水を引き裂きながら泳ぐ 何と多くの水鳥たちが
「その可憐な歌声で 我が耳をうっとり^ととせることだろう。
「また 彼らは 大空を飛翔している際にも 100
「また 下方の湖の上で 喜び勇んで
「航行する際にも 私の目を楽しませる。
「けれども 彼らの姿や羽毛が如何なるものであれ
「彼らをすべてを 一つのグループとなすことは出来ないのです。
「彼らを飛ばせて見なさい また泳がせてみなさい 105
「彼らは ピクチャレスクなるものを拒むでしょう。
「全くの一人ぼっちで 座っている小鳥は ただ
「石に刻まれるのに適合しているだけです。
「それから あの 一つの群れとなっている野生のガチョウたちを
「描くことは ひょっとしたら趣味^{テイスト}の人を驚かすかもしれません。 110
「尤も 私は それが小さいものであれ より大きなものであれ
「単一の姿を好む者ではないのですが。
「あの土手に 一人で座っている
「あのまったく痩せこけた釣り師は
「人の目を惹きつける訳ではありません。彼の衣服を脱がせ 115
「直ちに彼を ボートに乗せ グループの一員としてみなさい
「そうすれば 彼は 湖水の上で 一つの美しい対象となる

- 「あなたは そういうことを見て取ることでしょう。
「もし ある少年が^{フープ}輪遊びをしているとしたら
「それだけで絵になります。それはグループを形成する訳ですから。 120
「画家の目の中では— おお 樫の木の上に 小鳥を置くこと
「それは 何たる冗談と映ることでしょう。
「同時に 枝の上に 巣を固定させることも
「その冗談に 冗談を上乗せすることになります。
「様々な色相をし 美しい模様を持った^{ます}鱒は 125
「私たちの目を喜ばせます。
「しかし しかし 彼をキャンパスの上で泳がせるなど
「愚かなる気紛れにすぎないでしょう。
「それで 必ずや その上品な魚は お皿に載せられれば
「まさに 美しい姿となることでしょう。 130
「そして 鱒は^{ます} 不味い夕食としかならないと考える者は
「感謝心のない 大きな罪人であるに違いありません。」
- 「ピクチャレスクにおいては 最初も 中程も
「そして最後まで すべてが^{ポールド・コントラスト}大胆な対照にあります。
「そして 絵画も この壮大な対象を生み出す以外に 135
「何らの高尚なる効用は 持たないのです。
「それが 私が思っているもの そしてそのこと追求してゆきたい。
「見本を示して進ぜましょう。よくご覧ください。
「ほら 向こうのあの木を。あの美しい 大胆な
「突起物とで言えるものを ちょっとだけ見てみませんか。 140
「向こうの枝を見なさい。それらが作る影が
「光の塊によって いかに姿を現しているのかを。
「また あの光をご覧なさい。そして背後の影が
「何と美しく その光を輝かせているのかを。
「空に斑点をつける陰鬱な雲たちが 145

「青い丸天井を 二倍にも高くしていますよ。
「そして 太陽光線が 暖かく燃えるところでは
「虚ろな窪地を それが 二倍も低く見えさせている。
「フランドールの画家たちすべてよりも 絵画をガラスのように
「滑らかにする点で それらの方が優っているのだ。 150
「コイプ¹¹の最高の作品のなかには 美しい絵画もあるのだが
「しかし それらは大胆なピクチャレスクを欠いているのです。」

「こうして 私は小鳥たちには 啼くがままにし
「また 迅速な翼で大空を劈く^{つんざ}ままにしているけれど
「また 魚たちには 網が彼らを地表へと引きずり出すまで 155
「自由に戯れさせているのだが
「優しい自然は おお 常に恵み豊かなる我らの母よ
「彼女は あれやこれやと工夫を凝らして
「我らの適切な願い事に対しては
「限りのない多様性を示しながら 埋め合わせをして下さる。 160
「四本足の動物たちの世界は 多様な点で
「画家の技を 披露してくれる。
「しかしながら 私の喫緊の目的に叶うものは
「毛むくじらの 野生の獣なのです。
「それも いかにか巧妙に描かれた上品な作品でさえ 165
「彼らの姿・形からは 決して類似物を生み出さないような 獣なのです。
「競馬のコースのために育てられた 輝く皮膚と
「勝つための脚を持った 育ちの良い競馬馬たちは
「なる程 美しさを持っているかもしれませんが それらの美は
「私の絵画芸術を展開させてくれる美ではありません。 170

¹¹ 原文は“Cuyt”。「コイプ (Albert ~) m 1620-91; オランダの画家。Cuijp とも綴る。
(『ジーニアス英和』)」

「骨が見えるような 私の痩せた牝馬こそが 彼ら 美しいけれど

「甘やかされた馬どもの 二十倍かそこらの価値があるのです。

「大胆なデザインに 一つの効果をあたえ

「私のものの見方を 飾ってくれるのです。

「あなた方 スポーツ好きの方々は 美しい駒ステイードに額づかれるが 175

「ピクチャレスクは 雌牛をこそ 好むものです。

「彼女の高い臀部と 角が生えた頭部には

「光と影が 何と生き生きと 降り注がれていることか。

「実に 私は 美しい子馬と 普通の子牛を

「非常に 愛している次第です。 180

「毛を刈られていない羊や 毛むくじらの山羊

「荒々しい ゴツゴツの衣服を着たロバなどは

「趣味テイストに靈感を受けた精神に持ち主にとっては

「かの名高い<日食エクリプス>を 後に残すこととなるでしょう。

「壮麗なる厩での生活を 彼は楽しむでしょうが 185

「決して 私の木々の下で 草を食むことはないでしょう。」

博士のそのような言葉に捉えられて 北国育ちの郷土は
博士の学識を 賞賛せずにはいられなかった。

しかし 同時に 博士のご機嫌と 彼の顔色を

問いただす意志をも 併せて持った。 190

「すぐ近くに 私の家がございます。」彼は言う。

「そこで どうぞ 何なりと仰せくださるよう。

「そこに 私は雌牛と 驢馬と

「それに 豚と羊を それも少なからず 所有しています。

「あなたがいらっしゃれば 誰にも邪魔されることもなく 195

「お望みのままに 彼らを描くことが出来るでしょう。

「あなた様は 愛馬とご一緒に ご遠慮なさらずに いらしてください

「そこでは 田舎郷土の夕食も差し上げるでしょうから。

「もし 数日ご滞在でしたら

「あなたには肉を 馬には草を進ませましょう。」 200

そのようなことが同意された。彼らは岸边につく そして
一行は 家まで ゆっくりと歩いた。

しかし 彼らが 美しい館につく前に

グリズルは すでに主人を そこまで運んでいた。

実に そこは快適な場所であり 205

この同じ田舎郷士の所有物であった。

さてさて 今や シントックスは 一行と合流し

自由な 優しい挨拶を交わした。

郷士

「シントックス博士 こちらは私の妹でございます。

「あなた様は 彼女に まだキスの一つもお与えになっていませんが。」 210

シントックス

「私を そのような 可愛い挨拶を軽蔑するような

「野獣だとは どうぞ思わないで頂きたいですな。」



郷土

「そうして こちらが 我が愛する妻
「我が人生の 喜びであり名誉である妻でございます。」

シンタックス

「拝見するからに お美しい奥方ですな。 215
「あなたのお許しを得て 奥方にもキスをして差し上げましょう。」

このようにして 快適な言葉が彼らの会話に花を添えるうち
テーブルには 夕食の準備がなされていた。
そこでは 暖かい歓迎の言葉が
豊かなご馳走への情熱を 一層募らせた。 220
博士は 食べて おしゃべりをしては 痛飲した。
善良な主人は微笑み 貴婦人方は大いに笑った。

郷土

「あなた様は 家禽も魚も軽蔑なさっているのですから
「あなたの芸術は あのお皿を描くことは出来なさらないでしょうね。」

シンタックス

「それは 飢えに救済を与えてはくれるでしょうが 225
「牛肉には 何らピクチャレスクはありませんからね。
「でも もしあなたがおもてなしを施せば あなたの夕食を描く
「画家たちはいるでしょうよ。つまり 夕食を食べすくすような。」

郷土

「しかし あなたの画筆は 高貴なもの
「广大で壮麗なものすべてを 支配されることでしょう。 230
「確実に インドに住む野獣も です。」

「獐猛な 野蛮なる虎たちが吠え狂い

「恐ろしい 飢えたライオンが 怒号の声を上げているインド。」

シントックス

「あなたが言及された野獣たちは すべて主題に適しているでしょう。

「しかし 彼らは己れの絵姿欲しさに モデルとなってくれるでしょうか。235

「私は むしろ象の高い背中に乗って

「斜めからの光景を見て取るだけでしょね。

「そして 彼らの鋭い爪が 私を狼狽させることのないように

「五十人ほどの インド人を 私の周りに侍らせて です。

「しかし 今は 夕食も済み 240

「お酒もたっぷり頂いたからには

「もっと 危険の少ない動物をスケッチすることで

「この祝宴に 喜んで終止符を打ちたいのですが。」

博士は すぐさま 一行の同意を得て

ただちに 彼らは農場へと 急いだ。 245

^{たらい} 盥がひっくり返されて それが彼の座席となり

動物たちは 画家との初のご対面。

雌牛 驢馬 羊 それにアヒルに鶯鳥たち

自ずと姿を現して 作品に飾りをつける。

哀れ グリズルもまた 残りの者たちとともに 250

真のピクチャレスクに心を奪われて

牧場を離れて ここに姿を現す

そうして 最後列に己れの居場所を探し出す。

羊は 一斉にメーと啼き 驢馬たちは喚きたて

雌牛たちはモーと鳴き グリズルはヒヒーンと声を上げる。 255

「お前たち その^{うるさ}五月蠅い叫びを 止めないか。」彼は叫んだ。

「私は<聞き>たくはないのだ <見>たいのだよ。

「尤も **ピクチャレスク的**¹² 法則に従えば

「お前たちもまた 口をあけている状態のほうがいいには決まっているのだが。」

博士は さてさて 大いなる天才ぶりを発揮して 260

最初に一頭の雌牛を そして次に一頭の豚を描いた。

それから 一頭の羊がキャンパスを通過し

次には 群れなす驢馬たちを スケッチする。

また グリズルにも 最善の義務を果たし

全身に 彼女の美を装わしめた。 265

「で 博士さま」と（笑う妖精である）娘が言う。

「あなたご自身のお顔も 描いて欲しく思いますわ。」

「全身全霊を込めて描くよ。」博士は言う。

「だが 私の頭には角は生えてはいないのだがね。」

「それから 次には私の顔も描いてほしいのですが・・・」 270

「美しきお嬢さん 私の腕前では その魅力的な微笑みも

「その生まれながらの優雅さも 素描しても無駄でしょうね。

「美の輝く光線には 私の芸は向いていないのです。

「**ピクチャレスク**なるものが 私の唯一の狙いなのですから。

「私の画笔の技は 私自身の顔のような 275

「そんな顔を描く際に 最も発揮されるのです。

「悲しいかな **時間の神**と心配げな**悩み**が

「そこに こんなにも沢山の皺を置いた この顔を。」

さて 枝葉を広げる樹木のしたで

彼らすべてが会話を交わし 夕べのお茶に舌鼓を打った。 280

そこで シンタックスは 己れの変化に満ちた運命と

¹² 原文では、この場所で初めて“picturesquish”という、珍しい形容詞が使用されている。
「ピクチャレスク的」と訳した。

学究的な生活と 結婚の現状を 語った。
そして 己れの**旅行**が やがては 自分に慰安を与え
己れの**財布**を改善してくれることを願っているのだ とも告げた。

こうし最後に 彼らは屋敷へと引き下がり
ほどなく 夕食のテーブルの周りに集まった。
そうして 時は急ぎ足で過ぎ去り
陽気な 上機嫌状態が その一日を 閉ざした。 285



第十五曲

美德は あらゆる状況を 包括する。
豊かで 偉大なる者を飾る間も 人生の
隔離された道を 慎ましく**彷徨**う者たちの心をも
彼女は優しく 元気づけてくれる。
一方で 驕れる玄関の下からは
富が現れては **紐**り付く群衆を救出し
道に疲れた巡礼者は 慎ましい家庭のなかで
歓迎の宴に**与**り 心から微笑む。

壮麗な大広間と 化粧された東屋では
ブレンディ
豊かさが 宴の時間を飾って締めくくる。 10

しかし 秘密の谷間に 今もなお
慈愛に満ちた美德たちが 住んでいる。
そして この素晴らしき 美しき島には
優しい慈悲が いたるところに存在している。

都会の広大な領域の内部にも 15
彼女の堂々たる財宝が 取り巻いているのが分かる。
そうして そこでは 人間のか弱い性質のなかを支配している
凡ゆる欠乏も 凡ゆる苦痛も
やつれ果てた悲哀の悲しき後継者も
神の有り難きかな！救済を与えられるかもしれないのだ。 20
また 他方では 貧しい村の緑地の上で
低い屋根にしか過ぎないけれど 何としばしば
貧困が 己れの悲しみを忘れ
疲弊した老齢も 憩いを見出すことが有りうることぞ。

「おお 三倍にも幸せなるブリトン人よ。怒り狂う 25
「容赦のない戦争の車が
ちのり
「血糊のべとつく 忌まわしい轍を わだち
「幾多の不幸なる 遠くの岸辺に 残してゆくとき—
「また 情け容赦なき暴君の手が
「外国の地一つ一つのなかに 悲惨さと 30
「恐ろしき破壊を しかも 玉座から
「田舎家を所有する者にまで 分配し与えるようなときに
ピース
「平和が 汝の 海に囲まれた島を 眩しく照らす
「そこでは 輝く美德が常に微笑んでもいるからだ。
「また そこでは敵意ある雄叫びも 35
「幸福な同居人の温和な憩いを 悩ますことはない。

「彷徨^{さまよ}う定め^の者が どこへ行こうとも
「そこでは 武装した敵に出会うこともない。
「いいや 彼の行路が どの方向に向かおうと
「確実に 彼はある友人を見出す機会を持つのだ。」 40

こうして 朝早く起床したあと
野原を散歩しながら
博士は 自らの内なる思いを繰り返した。
そして詩^{ミューズ}の女神^ズの靈感を受けたこともあり 詩の形で。
というのも 彼はいかなる物も 絵に描く技術を持ってはいたが 45
おお この尊^{ヒズ・レヴェレンス}師様は また詩人でもあったのだ。

しかし すぐに甲高い鐘のチリンチリンという響きが
牧場の周囲にまで 反響し
鐘が告げることができる限りの明白さで こう告げていた。
「朝食の時間ですよ。はやくイラッシャイ。」 50
その歓迎の召喚の音に 彼は従順に従って
ある東屋の快適な木陰を見出した
そこには 豊富な食事が広がられている一方で
彼の頭上では スイカズラが誇らしげに翻っていた。

「ああ 誇り高く また偉大な者たちは 55
「お国の華やかなお仕事にまみれて
「優しい心を決して飽きさせることのない
「この素朴だが 真実の喜びを 殆ど知らないだろう。
「おお この心を蘇^{よみがえ}らせるような 何たるご馳走が
「この田舎家の座席をば 喜ばせていることだろう。 60
「活気づけられた趣味^{テイスト}を喜ばせることの出来るすべてが
「この美しい食事のなかに 提供されていることよ。

「花たちも 生まれ育った花壇の上で
「甘美な芳香を あたりに振り撒いている。
「この可憐な花々と 美を競っている別の花が 65
「乙女の美しい頬の上に咲き 我が目を惹きつける。
「その声が ここで 私に歓迎の意を述べるとき
「何と甘い音楽が 我が耳を愛撫することか。
「本当に 五官のそれぞれが 現在というこの一瞬を
「幸福感と結びつけ この一瞬を祝福しているのだ。」 70

そう博士は語ったが 無駄な語りでもなかった。
婦人たちは その言葉のなかに お世辞の調子を聞き取ったが
その儀礼的な言葉にたいして お返しとして
博士を喜ばせることは 十分には出来なかった。
「博士様 あなたがご覧になるすべては — もしそれが魅力だとしたら 75
「私たちの農場の生産物でございます。
「このロールパンは美味ですが 私たちのオーブンで焼いたものです
「また このオート麦ケーキも 私の姉が作るのですよ。
「クリームも豊かに取れて どうぞ ご遠慮なく召し上がれ。
「あなたが描かれます あの斑色まだらの雌牛が それを与えてくれるのです。 80
「そして 取れたばかりの果物も どうぞご賞味ください。
「あなたのお口に合いますかどうか。
「今 差し出させて頂いているものは 全部 田舎料理に過ぎませんが
「私たちが 選りすぐった 最高のものと考えています。」

「おお」と郷土は言う。「博士は 貧しいが無害である 85
「我ら 田舎人を 冷やかしておられるのだ。
「不思議なのは 博士が ごく当たり前の常識人であって
「しかも かように人を満足させる雄弁を持っておられながら
「慎ましい僧職者のままであられ

「少なくとも 立派に太った主席司祭になられていない ということだ。 90

「私たちに分かっているのは どんな貴婦人でも すぐに

「博士の優しい響きの声に 耳を傾けるだろうということ。

「また 同時に ここで自由に言わせてもらいますと

「世間の人間たちは 同じように 虚栄心に満ちています。

「ここで 学識深い我が友人であられる博士よ 一体全体 95

「あなたが 未だ目的を達成なされていないのは どういう訳ですかな。

「凡ゆるあなたの素描も 巧みな話術でさえも

「当然報われるべき希望を 未だ 達成なされていないとは。

「思いますに あなたの輝ける才能と なかんずく

「物を引き立たせる類の ^{たくい}あなた様の芸術は 100

「あなたの愛される灰色の牝馬をも

「豪華な四輪馬車を引く一対の馬へと 変えていたことでしょうに。

「私は 生まれ故郷の森のなかに住んでいまして

「その静かなる光景を 生まれながらに 愛してきました。

「しかし 今なお ^{フラクタリー}褒め称える術によって 如何なる利得が転げ込むのか 105

「分かっていますし しばしば目にするところです。」

「それ 本当かもしれませんな。」博士は言う。

「ただし ^{フラクタリー}褒め術は 私の仕事ではありません。

「どうも 郷土殿 あなたは私を不当に扱っておいでだ。

「いかがわしい興味があって 言葉を発しているのではありませぬぞ。 110

「名誉と美德を 私は愛する者でありますし

「それは僧正様でも 郷土殿でも 一緒であります。

「私の最も忌み嫌うものは ^{フォールスフッド}虚偽であります

「それが如何程 富に飾られ 威厳の冠を被っようとも デス。

「^{トゥルース}真理に関して。私は 大胆なライオンの如き者です。 115

「卑しい嘘など ついたことはありません。

「実際には 正餐を求めて いかに多くの罪人が

「束になって 嘘をつくのか 分かっております。

「でも 私は ごく幼い頃から

「真理を崇拜し またそれを実行してきた積りです。 120

「いいえ それだけではなく 愛する可愛い妻と一緒に

「幾多の 嵐^す荒ぶ 辛辣なる戦いをもくぐり抜けてきました。

「彼女は その夫が 上品な華麗な主席司祭となっている

「そんな姿を目にしていたのにと しばしば言う始末です。

「実際に 彼女は時々 自分の夫が その額に 125

「司教冠を被るかもしれぬと 思っているらしいのです。

「もしや 良心の咎めさえ 気かけなければ

「他人様がそうであるよう 私の主人も そうなるのではないのかと。

「いいや 私は 司教の衣服を着ろうとして 嘘をつくわけでもなく

「おもねるのでもなく また世辞を言うわけでもありません。 130

「私もまた 私の流派の域内での

「ある一定の規則を自慢し 重んじる者であり

「いかなる過ちが 周囲を通り過ぎようとも

「私は 決して嘘だけは 容赦しません。

「私は ブナの若枝鞭を使用することには 嫌悪感を抱きますが 135

「しかし もし ある子供が 神様に偽証するとしたら

「もし その子が 意図的にその偽証に取り組むとしたら

「その罪人は 私の重たい打擲^{ちようちやく}を受け取ることになるでしょう。

「悪徳を 私は嫌います 誰がそれを示すのであれ

「そして それを見たら それを暴いてみせます。 140

「しかし 親切なる心の持ち主には 相応^{ふさわ}しい敬意の念を払う者ですが

「特に あなたの方に対して 感謝を申し上げたいのです。

「そして 郷土殿よ 私が このお二人の貴婦人に負っている

「敬意の気持ちを どうぞ ご理解頂きたい。」

郷土は ここで返答をする。「完全に 私の負けですね。 145

「あなたが この農場の主人です。

「この婦人たちも 必ずや あなたが 公正なやりかたで

「私を 打ち負かしたと 同意することでしょうな。

「でも いいですか すべて冗談はさておいて

「私は 心底から あなたの ご理論に賛同致します。 150

「あなたの自由な生まれのご振る舞いを 賞賛しますとともに

「あなたを 友人を呼べる幸せを 嬉しく思う次第です。

「おお もしあなたが この地方の教区^{レク}牧師^クにでも

「なられたら いかにも 私の心も活気づくことでしょう。

「私たちの主任司祭様は 是非ともお伝えしておきたいことですが 155

「<お祈り>よりも <お酒>と<狩猟>を好んでおいでなのです。

「彼は 遠慮会釈もなく 平気で呪ったり罵ったりなされます。

「そして いかなる暴動にも 常に加担され

「更に悪いことには 野兎を捉える罠^{わな}を仕掛けられるのです。

「時々 彼の首が砕けたらいいのにとか 酔っ払って 160

「湖の底へと 転げ落ちたらなあ とか願うことだってあるのです。

「というのも いいですね 生活を与えるのが 私の仕事

「そして あなた様は その牧師職を是非とも お受けください。

「そのお給料は 確信して言えますが 一年につき

「少なくとも 三千ポンドにはなるでしょう。」 165

「有難う 郷士殿 全身全霊をもって感謝です。」

そうシントックスは言った。「でも お別れしなければなりません。」

貴婦人たちも言う。「もう少し ここにご滞在いただけませんか。

「あと一日だけでも 私たちとお過ごしになられませんか。」

「ご婦人がた それは謂わば 私の決断にかかっているのですが 170

「もうあと一刻も ここにお世話になっている訳にもまいりません。

「あなた方のご親切 魂の奥まで染み込んでいます

「そして 私の運命をコントロールできたらと願いますが

「何しろ あと十日以内に 私は家に戻るよう
「その時が 近づいて来ているのです。 175
「それが全てでもありません— こう言えば奇妙に聞こえるでしょうが
「私は ロンドンを手中に収めなければならないのです。」
かように 懇意の会話が その時間を陽気にしたが
その時に 門のところに グリズルが現れた。
「そうですね」郷士は言う。「ご出立されなければならないのでしたら 180
「私どもの心からの願いを お聞き届けてください。
「もし あなたのご天分が もう一度
「この湖水地方への訪問を 命じるとしますならば
「どうか この<蒼れの館>^{ワージー・ホール}を思い出して下さい
「そして その時には もっと長いご滞在をなして下さい。 185
「どうか お手紙を書いて あなた様の旅が どのような成功を
「収めたか どうぞ この遠くの友人たちに お知らせ下さい。
「それから これを どうぞ賄賂としてお受け止めになるのではなく
「あなたの作品への ささやかな援助と 受け止めて下さい。」
婦人たちも 叫んだ。「もう一度 是非とも 190
「私たちの北国の座席に 訪問してくださいませ。」

哀れや シンタックスは 余りにも胸を熱くする
感謝の気持ちゆえに どのように返礼をしたものか 途方に暮れた。
そして 遂に出た言葉。「さようなら！」の一言だけで
彼の両目には 涙が 熱く輝いていた。 195

博士は 道を急いだ
すると その日の終わり近くになったが
その時に 美しい町が 視界に現れた。
そこで 彼はその夜を過ごすことになる。
しかし 彼が予定していた宿屋に着いたとき 200

家主は 横柄な笑いを見せて
シントックスが 頭を休めることの出来る
ベッドは一つもない と 直ちに宣言した。
少なくとも あなたのような牧師職の方が
憩いを取るのに相応しいと思うだろう場所はありません と。 205
闘鶏試合が その日 行われており
参加した紳士たちが すべて 滞留するのを選んでもいたからだ。
「いいかね 友よ。私は 費用はいくらでも構わないのだよ。」
シントックスは 媚びへつらう宿主に そう言う。
「しかし 少なくとも 厩^{うまや}で グリズルと一緒に 210
「眠ることができたら それでいいと考えるよ。
「つまるところ 多くの博士たるものは 馬小屋でも
「うたた寝をとるのを 誇りに思っているものなんだ。
「一言で言えば 私は 悪漢もゴロツキも忍び込んでくることがない
「そんな場所で 眠りたいだけなのだ。 215
「私は 上着の着替えも持たず 旅をしているし
「これらのカバンには 私の財産すべてが入っている。
「もし それを失くせば 我が身の破滅となるだろうし
「私の 永遠の零落を意味することになる。」

こう彼が話していると だらりと垂れる弁髪と 220
上品な花形記章¹³を付けた 元気な若者が
直ちに返答した。「私は 部屋をとっていますが
「待てど暮らせど 相部屋をとる筈の友は やって来ません。
「私たちが休むはずだった二つのベッドのうち
「牧師様 どうぞ良い方を おとりください。 225
「そうして 安らかにお休みになりますよう。そこならば

¹³ 原語は“cockade”: 名 (古) (英国王室の従僕の) 花形の黒皮帽章 (『ジーニアス英和』)

「<生きている奴ら>で あなたに危害を加える者もないはずです。

「どうぞ 私の言葉を 信じてください。

「私は 国王に仕える者で 剣を身につけています。」

「あなたのお申し出を」シンタックスは言う。

230

「喜んでお受けします。しかし 最上の飲み物と食べ物については

「すべて 私のおごりですぞ。

「あなたは ご自身のお好みに合わせて

「夕食のメニューをチェックなされておられますよう。」

博士とその船長は 互いのお喋りに

235

飽きるまで 席に着いていたが



二人共 休息という馨しい時間を

取るのが最善だろうと 結論づけた。

シンタックスは やがて 疲れた目を閉ざし

近寄る災難のことなど 少しも考えなかった。

240

その間 丁度 常に目を見張っている蛇のように
獲物に飢えた彼の相棒は 目を開けたまま横たわっていたのだ
獲物に襲いかかろうと待ち構えながら。

そうして 夜が明けるが早いか

彼は 静かに 狙いを定めた品物を掴んだ。 245

しかし 彼が軋^{きし}る扉を通過するときに
シントックスは目を覚まし その泥棒を目にしたのだった。

そして 大声を出しては 助けを求めながら

殆ど裸の状態 で 部屋を駆け出し

遂に 門のところで その犯人を捕まえた。 250

その門に 彼は犯人の頭をぶつけさせ

それから 彼を足で蹴りながら 大通りまで突き出した。

この宿の馬丁が その殴打の音に間に合うよう

彼のベッドから起き上がって来た。

シントックスは言う。「私は 大騒ぎを起こしたくはない。 255

「どうか 紙幣だけは災難に合わなかったし 静かにしていきましょう。

「あの悪者めは もし私に間違いがなければ

「己れの脚力にかけて この危難を逃れようとしているのです。

「しかし ああ 私の何たる異様な風采であることか。

「ここに立ちすくんで 震えているわけにも行きませんな。 260

「どうか こんな見知らぬ道へとさ迷い出た

「その元の部屋へと 私を連れもどしてはくださらぬか。」

その馬丁は 博士の願いを聞き入れて

元のベッドの 暖かい安楽へと 彼を連れ戻した。

そうして 博士は 急いでベッドに忍び込んで 265

頭の下にカバンを置き

その枕の上で 安らかに眠った。

第十六曲

公正なる美德^{ヴァーチュエー}は 自ら報酬^{おのづか}を持つ。

天^{ヘヴン}が その恒常的な守護者であられるゆえに。

我らに相応しきは この壮大なる真理を

恃^{たの}むこと— 天は 正義なり と。

人の定めを 何が形作ろうと

5

宮殿であれ 賤^{せん}が家であれ

静謐なる道であれ 足しげき往来であれ

人は 己れの多様な道を 歩みゆく—

己れの微笑む時間を 堂々たる広間で楽しむのであれ

彩色を施された東屋で 楽しむのであれ

10

また 一日の労働を 冬の寒さのなかで費やすのであれ

夏の光線のなかで 費やすのであれ。

或いは 耐え難き苦痛の 長い夜には

その目を閉ざそうと努力しても無駄なこともある。

しかし もし美德が 心の友であるならば

15

慰安^{カンフォート}が 彼の運命に 付きそうことにもなるだろう。

若き日には 愛^{ラヴ}の創造的な力が

若い情熱^{パッション}の薔薇色の東屋を 形成する。

そして 生が成熟しては 富を漁り

また名声を求める 熱烈なるゲームが 演じられる

20

しかも 巧妙な形で 精神を把握し

感性を満たすような 様々な技芸を付け加えて。

そんな時に 快樂^{プレジャー}は 己れの魅惑を展示して

妖婦^{サイレン}たちは 人を欺くがためにのみ 歌を歌う。

しかし もし美德が呼び出されるとしたら

25

それは 凡ゆる敵の攻撃に 挑みかかるであろう。

そして ^{エイジ}老齡が 忍び足をしながら やって来て
松葉杖が 人生行路に終止符を打つようなときに

美德は 彼女の擁護者の大義名分を唱えて

愛情深き喝采の声で 老齡を元気づけてくれる。 30

そればかりではない。死の床の憩いなき時間においても

今尚 彼女は 良心的な力を誇示し

必ずや 墓場の暗い牢獄の周囲に

花々が 咲き乱れるがままにするであろう。

このような瞑想状態に シントックスは陥った。そして 35

己れの頭の周りを見回すとき カバンと紙幣が 安全で
健全なままに あるのを発見しては 感謝心に満ちていた。

先の眺望にも安堵しながら 大きな欠伸をしては

喜んで 再び眠りについた。

しかし 彼がなおも夢の世界に遊んでいる時に 40

彼の物語が 凡ゆる人たちに

あまねく行き渡る恰好の話題となっていて

この宿の近郊にまで 大きな騒ぎを起こしていた。

最初に馬丁が そのことを女中に語り

彼女は そのすべてとというか もっと多くを暴露した。 45

そうなのだ おざなりだが熱烈にお喋りしているうちに

彼女は 門を窓と取り違えていた。

というのも 彼女は 心地よく静かに

大騒ぎも意識せずに 眠っていたのだが

こともあろうに 牧師が 窓から 50

丸々太った大人を 大通りへと

投げ捨てた と宣言したのだった。

そして その男は たまたま 立ち上がって
ナイト・キャップを身に付け シャツは半分しか着けずに
泥芥のなかを 走って逃げたと 告げたのだった。

55

今度は 床屋が その話にくっついた。
しかし ^{テキスト}本文からは 更に離れていった。
客の顔を半分剃り残したままに 走り出し
その区の聖職者へと 話しに行ったのだった。

「おお 神様のお恵みを！」彼は叫んだ。「言葉にするのも
「恐ろしいことですが どうぞ 牧師様 お聞きください。

60

「^{サブローベル}青鐘亭>で とんでもないことが起きています。

「そのことで きっとその旅籠は 破産するでしょう。

「いや 生きている限り これ以上は語れないことです。

「ある牧師さんが 殺人を犯されたなんて。

65

「彼は 船長の脳天を ぶっ掴んで

「脳天を 門めがけて ぶん投げなさったとか。

「それで 板という板はぜ～んぶ

「散らばった脳みそと人間の血糊で 覆われたということ。

「その牧師さんが そんな殴打をなされたもんで

70

「船長は 逃れようにも逃れられなかったんですな。

「で 皆が言うには 二人は

「黒か赤かという 色のことで口論になったとか。

「船長のほうは 断固として 輝く緋色こそ

「最高の色だと告白した とのこと。

75

「そして その美しい色を身につけている者たちこそ

「凡ゆる職業のなかの第一級の職に就いているのであって

「一方 黒は— 礼儀正しい色でもなく—

「よく知られているように 悪魔のお仕着せの色なのだ と。

- 「こうして やがて 大きな議論が立ち上がり 80
「それが ^{かまびす} 曇しい口論から殴り合いへと展開し
「かような 船長が命を奪われるような
「血生臭い戦いになった。
「そして もし公正なる正義^{ジャスティス}が躊躇さえしなければ
「彼女は その僧侶に 絞首刑を施すだろう と。」 85
主任司祭は そこで微笑んで その若者に
家に戻って 残った半分の髭を剃れと 命じたが
彼が帰宅した時には 石鹸を塗られていたその客は
すでに 残りの半分の 自分の手で 剃っていた。
- 次に 仕立て屋が 己れの針仕事そっちのけで 90
小役人から 同じ話を聞いていた。
この役人は かの<青鐘亭>で何があったのか
奇妙な知らせがあるぞと宣言していた。
- 「きみは 信じるかい? 昨晚のことだがね
「腕自慢の追い剥ぎが 95
「あのベッドのなかで 一人の弁護士を縛り付け
「そいつから 千ポンドを奪ったらしいぜ。
「そして そいつに猿轡^{ざるぐつわ}を噛ませた なにせ
「家のなかで眠っている者たちを 起こすわけにはゆかないからね。」
「いいや 違うぞ」仕立て屋は言う。「どんなに強くしたところで 100
「猿轡など 弁護士の口封じには 役には立つまい。
「で 結論なのだが その盗まれた金銭とやらは
「当の本人が盗んだに決まっているわい。
「俺たちが 本当のことを知るとしたら
「そいつこそが 二人のうちの 最悪のろくでなしということだ。 105



「結局 二人共根っからの泥棒であり それは変わらないと思うが
「すべて 法律的に言えば 絞首刑に値する奴らだね。
「それがすべてなら 俺は 縫い物が気になってきたし
「ジョン・バムキンのズボンを放っては置けなくなったよ。」

今度は鍛冶屋の出番。新しい馬の蹄を作ってもらおうと 110
ある旅行者が 訪問しているあいだ 鍛冶屋は
ある尊師さんが 昨晚 暗闇の中で
首を絞められたと その客に告げていた。
どのようにしてなのか 誰わからないが <青鐘亭>は確かだよ。
だが 殺人者が誰なのかも 知る者はいない。 115
裁判所は しかし 慌てふためいて
そいつを探し出すと いきごんでいるのだとか。
かように 噂が その区域じゅうに
凡ゆる装いを纏って 素朴な事件を拡大していた。

博士はどうかといえば 今 目を覚まし 120
起きる時刻になったかなと 呑気に構えていた。

そうこうしながら 彼は起き上がり 階下へ降りると
真に取り乱した様子の宿主を 叱りつける。
宿主は 青ざめて 夜中に起きたことに対して
恐怖の余り 全身を震わせており 125
非常に控えめな表情で 近づいて来たものだから
博士の怒りは 直ちに そのクリスチャンの胸から
去っていった。そして この哀れな男の心を
喜ばせるような声を上げては
彼に命令を下した。「出来るだけ早く 130
「食卓を コーヒーで飾ってはくださらぬか」と。
宿主は 言う。「誓ってもよろしゅうございますが
「私どもが この商売を営んでこの方—
「そして町中のみんなが そう告げているように
「私が この<青鐘亭>の支配人になって以来— 135
「(実に 今や かれこれ十年かそこらになりますが)
「あのような不幸な出来事には 遭遇していません。
「あの男は 誓って言いますが 貴族さながら
「金錢を あちらこちらにばら蒔く始末でしたよ。
「私も 仕方なく ここへ来る連中は 受け入れており 140
「また あいつらがどれだけ滞在するのか 気にもかけていません。
「彼らは ただ食べて飲んで そして金を払う それだけです。
「彼らが どこから来たのか 尋ねもしませんし
「どういう名前なのか 家はどこにあるか なども。
「あいつが 悪漢であること それだけははっきりとしており 145
「二度と あいつを ここには来させないつもりです。
「あいつは 国じゅうを歩いて回るせいで どうも
「頭脳が 次第に 抜け目のないものになって来ているようです。
「そうして その無法なやり方を後押しするように
「あいつは 兵士の高貴な名前を名乗っているのです。 150

「あなたが打擲された その悪党めは
 「やがて 絞首刑— そうなるに決まっています。
 「あなた様のお金は全部 お手元にあると存じますか
 「聞いたところでは それは千ポンドくらいですとか。」
 「では 調べてみますか」 シンタックスは言う。「可愛いご主人よ。 155
 「調べたら あなたに お金の半分を差し上げましょうぞ。
 「ご主人よ 私は 学校にはいつも かなり遅刻してばかりで
 「愛馬のグリズルみたいなヤクザ馬の身体に吊るすために
 「銀行の紙幣を カバンにいれるだなんて
 「そのような間抜けではないと どうぞ信じてください。 160
 「いいえ それらは一冊の書物を生み出すためのお金なのです。
 「友よ あの泥棒めは 私の意図を取り違えていたのです。
 「いいですかな あんな男にとっては あれが1ポンドの価値さえないこと
 「そんなことさえ気づかなかったことでしょう。
 「尤も 私には あれこそが やがて大金を産むはずの 165
 「大事なものであったこと そうは思っているのですが。」
 こうして シンタックスは 宿主の気持ちを慰めた。
 そうするうちに 博士が出立する時間がやってきた。
 程なく 踏みならされた道を 哀れなグリズルが
 尊敬すべき師を背負って 進んで行った。 170

博士は 心は満ち足りて 待ち受けている
 遙か遠方への 長い道のりのことを 気にかけてもしなかった。
 道中では 長い距離に渡って 彼が目にしたものは
 ただ 何の変化もない 平坦な緑地だけであった。
 また その旅路は ピクチャレスクラシキ¹⁴ 思いを呼び覚ますような 175
 一つの対象物さえ 提示はしてくれなかった。

¹⁴ 原語は“picturesquish”である。

丘をつんざいてそびえ立つ 一つの尖塔が
町の近きを 指し示すようにも思われ
それを 彼は 歓喜の思いで 眺めていた
そこで その夜を一夜 過ごすことが出来ると思ったからであった。 180

さて 今度は 快活で陽気な農夫が
馬に乗って 急ぎ足で近づいてきた。
シントックスは尋ねる。「お聞きしたいが
「この道を行けば きみの町へ着けるかね。」
「旦那さん この道を行けば おいらの町に着くはずですよ。 185
「いま 町は ^{フェア}市の真っ最中でさ〜。
「それは 遠くからと 近くから 馬や 牛や
「馬具のような品々を求める者たちの 最初の市ですよ。
「おいらが 旦那の馬を見る限りでは
「旦那は 別の子馬を買いにおいでなさっている 違いますか。 190
「それから まさか この馬を売りに行かれているなんてことは
「ないでしょうな。本当のこと 言ってよければ
「市に出てくる誰もが 旦那の馬には
「十シリングも払わんでしょな。」
この冗談がすっかり気に入り また 長いこと 195
田舎人のあいだで過ごしてきたシントックスは
この田舎の大地の息子相手に
何か ささやかな浮かれ騒ぎを醸し出せはしないか そう考えて
二人が 踏みならされた道を ゆっくりと馬を進める時に
次のような会話の糸口を切った。 200

シントックス

「お百姓さんよ 信じてくだされ。長いこと 一緒に
「日照りの日も 嵐の日にも

「我が馬と 私は 旅をしてきたもんです。

「でも まだ 我らの仕事は 果たされていないのです。

「きみは 彼女の風采を軽蔑するかも知らんが

205

「きみが ほんの少しでも こいつの性格を知ったら

「多分 きみが 頭の中で考えているほどには

「こいつを 低く見積もるわけにも行かなくなるだろうよ。」

農夫

「旦那が お望みとあれば おいらは一ポンドかけたっていいや。

「その馬は 旦那に 二十ポンドも齎しはしませんぞ。」

210

シンタックス

「最初に いいかな 一つの真実を語っておきましょう。

「私は この愛馬を売るようなこと 考えてもいないんだ。

「一方で 賭け金を賭けるようなことも 嫌いなのだ。

「そんなことをやれば この衣裳を汚すことになるうし

「また この人生の旅を辿るうちに

215

「この神様に頂いた地位をも 汚すことにならないか。

「それは別として きみは 哀れなグリズルの性格と

「状況を 見くびっていると思うが どうかね。

「こいつが 美の年齢をとうに過ぎているのは間違いはないが

「それでも このお婆さんは ちゃんと義務は果たしているんだ。

220

「やがて こいつが 一ポンドの値打ちがあると考える

「そんな殊勝な人が 必ず 現れるだろうよ。

「いいや 田舎の人たちを喜ばせるためなんだが

「こいつを 競売に出すとしよう 冗談のつもりなんだが

「その際 誰ひとり 掛金を訝るものはいないに違いないよ。

225

「そして 提言もしたいんだが もし きみが負けても

「(キリスト教徒で 賭けを拒むものはいないだろう)

「そのお金を きみは 貧しい人に与えることになるのだ
「それこそ キリスト教徒の寄付金というものになるだろう。
「そして 仮に 私の年老いた 忠実な愛馬が 230
「誰ひとり そいつに 市で
「二十ポンドを差し出す気持ちさえ沸かないような
「そのような扱いしか受けないとしたら
「名誉に賭けて 私が 差し出そうと思うのだ
「シントックスという名前と同じくらい 確実にね。 235
「そういうことが 私が提示する条件なんだ
「そういうことで 我らの取引に終止符を打とうじゃないか。」
「あなたのお手を」と農夫は言う。
「おいらは その条件に合点だ。取引もなされたんだね。」
そうして 彼らは馬に跨がり 町に着いた。 240
タバコと大杯が その夕べに飾りを付けた。

次の日の朝がやって来て 農夫は
市いちのなかへと 灰色の牝馬を連れていった。
ある男が言う。「俺は 1ポンドの値段だっけつけないや。
「一頭の猟犬を養うくらいが いいところだよ。 245
「でも その猟犬だって こいつを受け入れるだろうか
「こいつは ただ 骨以外に与えるものなんて ないからな。
「どこを見れば 耳が見つかるかい？
「実際 こいつは尻尾を どこかに置き忘れてるぞ。」
別の男は言う。「こいつの傷痕を見なよ。 250
「こいつは 戦争で それらの傷を残したに違いないんだ。」

心温かき自作農ヨーマンが 通り過ぎてゆくときに
群衆の嘲る声を耳にして



彼らが なぜ笑っているのか
知りたくてたまらない そう思った。 255

ある男が言う。「牧師さんがね 旦那。心を痛めながら
「あの哀れな 老いぼれ馬を 売ろうとなさっているのですよ。
「そして 聞くところでは 1ポンドか2ポンドを要求なされているとか。
「あなた様だって あいつを買う気にはなられんでしょうな。」

「もし それが本当ならば」自作農は 言う。 260
「私が あの方の心を癒して差し上げよう あのを瘦せ馬を買って ね。
「よし 2ポンドを入札しよう いいかね 友よ はっきりと。
「そして 馬そのものは あの方にお返ししよう。」

ここで 先の農夫は 賭けに負けたのを認めて
その金を支払うために 己れのバッグを開けた。 265

「待ちなさい」シンタックスはいう。「そのお金は
「あなたが最も相応しいと思われるところで お使いなさい。
「私たちが 先ほど あの共有地を通ったときに
「あの田舎家の扉の前で

「糸車を紡いでいる女性を見かけましたね。 270
「彼女が 糸車を回して糸を紡いでいる間

「彼女の傍らには 3人の子供たちが 浮かれ騒いでいましたね
「楽しそうに。すべて自然の誇りである子供たちが。
「で 私は あそこに 歓迎される筈の賜金を残されること
「それを あなたのご配慮に委ねたいと思います。」

275

自作農夫は その冗談を聞いたとき
親しげな言葉で シンタックスに話しかけた。
「牧師様 私は近くに 粗末な館を所有しています。
「この町から およそ5ファーロング離れていますが。
「尊師さまを 是非とも そこへお連れして
「夕食を共にし 夜を過ごして頂きたいと願っているのですが。
「今日は 年に一度の祝宴を開く予定でありまして
「あなたがいらっしゃれば みんなが歓迎してくれるでしょう。
「私は 聖服を愛しています。そして あちらで あなた様の
「祝福がいただけますことを 切に願ってまいるのです。
「どうぞ いらしてください。あなたの愛馬も一緒に。
「どうぞ いらして 夕食を共にし また歌も聞いて頂きたい。
「そして タベともなれば 芝生の上では
「陽気な踊りも披露されましょう。」
「おお 喜んで」とシンタックスは言った。「私は
「あなたが提供なさるご招待を受け入れますよ。
「あなたのご親切な夕餉に 加わせて頂き
「まさに 感謝に満ちたこの心をも持参させて下さい。」
「私は」と自作農。「今は ここを離れねばなりません
「牧師様 午後1時には お待ち申し出来る筈です。」
博士は 長く遅れることもなかった。
彼の農場へと 道を選んだ。
そして 市の騒動を避ける形で その代わりに
優しい 静かな歓迎を そこで受けることになる。

280

285

290

295

第十七曲

おお 人生における^{カーテシー}礼儀正しき行いよ 万歳！
緑地のなかの慎ましい住居というべき
茅葺き屋根の小屋のみが見られる
平和な谷間であれ
或いは 都会の群衆の溢れる場所で 人が — 死すべき人間が 5
彷徨うのを宿命づけられている そんな所であれ
礼儀というあなたは 喜びに 魅力を付け加え
悲哀から その苦痛の半分を 取り除く。
人間は 凡ゆる境遇にいて 優しい礼儀が与えてくれる
その様々な贈り物に どれだけ恩義を受けていることか。 10
人間的な心情を飾り立て
嫉妬や闘争も意識することもなく
人生の凡ゆる慈善行為を飾ってくれる
その寛大で 心を惹きつけて止まぬ技芸に対して。
礼儀は 凡ゆる行為に 優雅さを与えてくれる。 15
凡ゆる顔に 微笑みを付け加え
従って 我らは 優しい礼儀に飾られた時にこそ
^{グッドネス・セルフ}善良さ自身が 際立って輝くのを目にするのだ。

このように シンタックスは 屋敷に近づきながら
感謝溢れる 心地よい思いに耽っていた。 20
そして すでにかの農夫が通っていた
敷居のうえを 弾みながら通過した。
すると見よ。^{フレンドリー}豊穰の女神が現れ 多くの客人が
歓迎の食卓についていた。
博士は 厳かな面持ちで 25

指定された座席へと進んでゆき
礼儀に叶った作法で その善意を寿ぐ言葉を述べた。
その感謝溢れる儀式が終わると
今度は やがて 激しい鬪争が 始められた。
とかくするうちに 肉もプディングも 鶏も魚も 30
すべて 豊かであった皿から 消え失せ
食事が終わり 今度は酒盃が 持ち込まれた。
豪快に飲むうちに すっかり快活な気分に関わられて
今や 陽気な博士も
泡立つビールを痛飲しながら 35
多くの物語を話し それで 笑いを勝ち取ったものだ。
しかし たまたまだが 客人のなかに
農夫の地主も混じっていた。
彼は 馬を飼っている幾分キザな伊達男で
競馬で ひと財産稼ぐことを目論んでいた。 40
同時に その鬪鶏の腕前でも名高く
また 狐を狩るための 頑強な猟犬の群れを養ってもいた。
そうして もし彼が 獲物でも仕留めたあかつきには
夜を通して カード・ゲームにうつつを抜かしたものである。
さてさて 彼は シntaxを挑発し 45
愚かなる賭け事へと 気持ちを走らせていた。
「私は 賭け事はしないよ」博士は言う。
その^{ひそ}顰めた顔が 彼の思いを代弁していた。
「お前さんの金貨を手に入れようだなんて これポッチも望まないね。
「私のお金は 私の財布になかに 留まらせておこう。 50
「いかにカードが誘惑し また賭け事で腕が鳴るといっても
「私のお金は 私のポケットから 決して出すことはないだろうよ。
「賭けゲームなど 地主さんよ 私の忌み嫌うものなのです。
「私の生計手段にも 私の立場にも ふさわしくない。

- 「それは 人間の心を訪れることが分かっている情熱のうちで 55
「最も悪しき情熱だと 断固として主張したいのです。
「つまり 凡ゆる邪悪な習慣のなかで 最悪のもの
「最も欺瞞的なものであり また最も呪うべきものなのです。
「それで あなたが望むならば あなたに
「一つの大変憂鬱なる物語を 示してあげましょう。 60
「それは きっとあなたの心臓を抉るような
「そして あなたの最も繊細な部分までも傷つける そんな話です。
「それは 鮮明な色彩を伴って
「まさに しばしば賭け事から流れ出す
「嘔むような痛みと 苦い悲哀を 示すでしょう。」 65
「とは言え」と郷土が言う。「私は しばしば
「自分の運を試したい気になるのを 否定できません。
「そして ここに居る誰もが もし私が負けたら
「その分 支払いをするのを 当然と考えているでしょう。
「でも あなたが それを大いなる罪だと仰るのであれば 70
「どうぞ 私を癒してくださいませ。さあ始めてください。」

シンタックス

- 「我ら この人間という種族のなかで
「共通に分け与えられた名誉に対して盲目になり
「激しい欲望が導く方向ばかりを眺めては
「他の道を進もうとしない そのような者がなんと多いことか。 75
「彼らは 名声という美しい花輪を身に付ける
「真の権利を それぞれが持って生まれながら
「自然が与える善を拒絶し
「天が授ける 凡ゆる恵みを 軽蔑している。
「そうです そのような人たちがいて そんな人たちが 80
「風がふくところならどこでも 見かけるのですね。」

- 「しかし 群衆のなかに 道楽に呆けて
フォーチュン ネイチャー
「**幸運**と**自然**が結びついて 一緒になって
「その財布を満たし その心を形成するような
「そんな男を見かけるとき 85
「彼の男としての力には 安楽さが色を添え
「人の心を楽しませる幸運な力を持つかもしれませんが
「彼が静かになった時には 天に提示していた筈の
「熱心なる誓の声も 聞かなくなり
「拳句は 彼の歩む場所には リベンタンス **悔恨**が 90
「浄めのための涙を入れた壺を抱えている。
「金銭への荒々しい欲望に突き動かされ
「まるで賭け事の神にでも 捧げものをするかのように
「己れの健康と生活と名声を捧げる
「そんな 哀れな犠牲者を見るときに 95
「**美德**の目の中には 大粒の涙が溢れ出て
「青ざめた リーズン **理性**が 痛恨の溜息をつくばかり。
ガーディアン・スピリット
「**守護** **霊**は 彼に背中を向け
ヘル
「**地獄**が 休日を祝うのです。」
- 「一体 地獄のような**悪徳**が存在するのか だって? 100
「友よ あるのだよ。それは アヴァリス **貪欲**という奴だ。
「**貪欲**とは もっと恐ろしい名前があるか だって?
「それが 実はあるのだ。友よ。それは 賭け事への欲望なのだ。
「しかし 多分 そんなことをすべて きみは 否定するのかな。
- 『私よりも恵みに与った人はそういない。 105
『シリング銀貨は落とされ ギニー金貨も飛び交ってゆく
『落ちぶれた 不幸な友に
『私は 扉を開け 財布を与えるのです。』

『快樂を買うために 私は 私の富を与え

『流行界の男のように 生きてゆくのです。』

110

「それは なる程 真実のことでしょう。しかし それでも

「あなたの胸は 黄金への愛情に所有されているのです。

「なぜ 終夜をかけて 致命的なカードに目を凝らし

「報酬あずかに与らんと 骰子さいころに 目を向けるのですか。

「あなたにも分からないし 他の誰も知らないようなことに

115

「あなたの正真証明の財産を 危険おとに陥おとし入れるのですか。

「それらは 邪悪な運命が 光線を当てて

「糞の山から 昼日中へと掬すくいあげた 蛆虫うじむしの類ですぞ。

「そして あなたの不運を見計らっては 騒さわぎを起し

「あなたの破滅をご馳走にしようと目論めづんでいる輩やからなのですぞ。

120

「それは 快樂どころではありません。あなたが 儲ける度に

「その儲けには 苦痛が混ざり合っている筈です。

「その苦痛が あなたの金銭箱の上を徘徊し

「そして 金銭は 束の間の快樂の時が 過ぎ去れば

「ああ 痛ましき不幸よ！既にあなたのものではなくなっている。」

125

「かと言って そのような時に 破産した男の口実を用いることも

「出来ないでしょうな。つまり 仕方なき必然性という口実をです。

「今のところ 豊穰ブレンティが あなたの食卓を飾り

「沢山の臣下たちが あなたを<主君>と認めている。

「あなたの森は 美しい装いをして 木々は増えるばかり

130

「また 木の精¹⁵たちは 平和に暮らしている。

「しかし カードと骰子は 最も切れ味のよい斧よりも

「遥かに強い力を持って

¹⁵ 原文は“Hamadryad”である。ギリシャ神話で「木の精」。

「恐ろしい一撃で しばしば 森を平らにし
「平地にしてしまう— そんな例がたつぷりとあるのです。 135
「そんな時には その一撃は 館の高い塔でさえ 引っ掴んで
「そこに住む主人を 門から追放してしまうのです。」

「ある若者がいました。富と流行に育てられ
「賭け事への愛に導かれ 彼は
「すぐに その豊かな富が朽ち果てるのを 目撃しました。 140
「農場から農場へと 遊び呆けて
「その悲しい身の上話を完成させるように
「彼の庭園も 芝生も 由緒ある座席も
「すべて 大急ぎで 売却されては
「彼は 準備された金貨の山に遭遇しました。 145

「しかし それらも 他のもの同様に すぐに手元を離れ
「悪漢の利益となり また詐欺師の餌食となったのでした。
「彼は 悲しいかな 己れを破滅させた その賭け事を
「二度としないこと それを決意して
「悲哀と苦悩に満ちた 疲弊の人生を 150
「過酷な仕事をするこゝで 維持して行くことを選んだ。
「しかし やがて自然は 生きて戦ってゆく その力を
「彼に与えることを 拒んでしまった。

「ただ 彼に残されたものといえば たまさかの^{ビテイ}憐憫の情が
「施してくれると思うものを 試してみることだけだった。 155
「そして 偶然か空腹感かが 導くままに彷徨っては
「わずかなパンを 身を低くして 乞うだけであった。
「ある日のこと 彼の絶望した目のなかに
「堂々と 空高く聳える館が 入り込んだ。
「そこを 長い時間をかけて見るまでもなく 160
「森と その森を巡って育つ雑木林を 認めた。

- 「と言うのも このように美しく見える光景の全ては
 「かつては 彼という主人の加護の元にあったのだ。
 「その光景に打たれ 胸は痛く押さえつけられて
 「身体を休めるべく 一つの土手を探した。 165
- 「そこに長く横たわり 哀しみのため息をつく
 「涙が溢れ出した。が 安らぎは 齎さない。
 「遂には 昔 さ迷うのをこよなく愛した場所を
 「よろけながら 歩み進むと
 「飢えに急ぎ立てられて 以前 物乞いする^{ウオント}欠乏が 170
 「待ち構えていた門のところへと たどり着いた。
 「物乞いする欠乏が そこであれば 肥大した^{プライド}驕りによって
 「残されたひとかけらの食物なら 拒まれることはなかった場所へ。
 「ああ しかし かの寛大なる時代は もう過去のもの
 「物乞いする欠乏は もはや 救済され得ない。 175
 「マスチフ番犬は吠えたてる— お仕着せを着た盗人めは
 「傲慢にも 救済するのを 拒んだのだ。
 「この哀れな男は 呻き声をあげては崩れ落ち
 「かつては己れのものであった玄関に 背を向けた。
 「しかし 背を向ける前に 彼は己れの名前を名乗り 180
 「今一度 賭け事を愛した己れを 呪った。
 「そして 自然は既に彼を見放していたので 芝生を求めたが
 「ただ 悲しみのみが 彼の全身を支配して その活力を奪っていた。
 「一本の樫の木が 枝を大きく広げている その木陰で
 「疲れた手足を ぞんざいに横たえると 185
 「天に向かって呼びかけた。(悲惨^{ミゼリー}の 苦い祈りは
 「(天には 進入を許される！)
 「そして 太陽が 告別の光線を放って
 「この日の最後の輝きを強める前に
 「欠乏と悲哀に 心身ともに沈み込んで疲れ果てて 190

「彼は 死のなかに 優しい安らぎを 見出したのです。」



「その樫の木は 悲哀の物語を記録しています。
「その物語を読めば 良心ある読者は 青ざめますね。
「それはこう語っているのです。『この男の運命のなかに
「『賭け事への愛と 黄金への欲望を 見よ』と。 195
「でも きみよ 私は何の教訓も伝えようとしているのではないよ
「きみ自身が 心の中で 感じ取っている筈だからね。」

「『我らは若い』 そうきみは言うだろう。『時代に遅れないよう
「『時代が提供する娯楽には ついてゆかねばならないのだ』と。
「もし そう思うなら 行きなさい。そしてきみの裸の山に 200
「森の緑したたるお仕着せを 身に付けさせなさい。
「パロス島の大理石で きみの大広間を飾り
「ティツィアーノの輝きを きみの壁には与えなさい。
「きみの その狭い水路を 大胆に破壊し
「小川を膨らませて 湖に変えなさい。 205
「労働が その骨折り仕事でもって 肥っているあいだ

「もっと豊かな収穫を目指して きみの土壤を耕しなさい。

「自然を奨励し 芸術の

「半透明の薄絹を 与えなさい。

「音楽に きみの)ける胸を 惹きつけさせ 210

「そして 情熱のすべてを慰めさせ 休息へと導きなさい。

「^{ジーニアス}天分に きみの手から それを生かすことの出来る

「賜物を 受け取らせなさい。

「そうして 高みから ^{ミューズ}詩の女神を 呼び招き

「不滅性を 勝ち取りなさい。 215

「それらのものに ^{エクササイズ}運動と^{ヘルス}健康が 結び合うような

「大胆な快樂を 付け加えなさい。

「朝が空け染めるころ 真っ先に

「獵犬と角笛を持って 丘を超え 谷を超えて

「狡猾な獲物を 勇敢に 追跡して 220

「一日の 勝利を 仲間で分かち合いなさい。

「また 夕方の時間には 仲間うちで回す酒杯の助けなしには

「千鳥足で歩くことがないようにして

「美しい^{フレンドシップ}友愛が 遠くに離れていることがなく

「祝日を 微笑みで終わらせるようにしなさい。 225

「自ら証明されているものを 私ごときが付け加える必要もないのだが

「美德溢れる愛情という領域に 誰が住んでいるかを 言ってみなさい。

「そこでは 優しい愛情が 心を満たし

「低俗な情熱は すべて 追放される。

「赤ん坊が ^{ビューティ}美の胸にすがりつき 230

「一方では 母親の両腕で愛撫されているときに

「卑しい思いや 悪意に満ちた野心のすべてを

「純情で 家庭的な心が 否認してしまう。

「美德は 無垢なる熾天使に仕える人の

「凡ゆる感覚に 靈感を与えて 235

「結婚生活という 静かな喜びのなかで
「相争う熱情を寄せ付けない 防御盾を求めるのだ。」

「これが生きるということ また 苦痛をなくしてしまう
「快楽を 楽しむということなのではないか。
「これが 生きるということ そして 善良なるものたちが 240
「与えるだろう 賞賛の言葉を受け取るということ。
「これが 本当の富の使用方法であって
「それが 紅潮した健康さを 更に高める使用法なのだよ。
「そして それが心を改善し 名声の 美しい
「馨しい花輪の所有権を 与えてくれるものなのだ。」 245

「牧師様 有難うございます」農夫は言う。
「悲しいお話をも 聞かせていただきました。
「その哀れな男の運命を 嘆いても嘆ききれません。
「考えれば考えるほど その気持ちは強くなります。
「そして 我が地主さんも 惨めな運命を 250
「きっと眼前に見据えておいでだろうと信じます。
「しかし 私の哀れな妻が 泣いているあいだ
「彼は なんとぐっすりと眠っているか ご覧下さい。
「我らも 状況を変える必要がありそうですね。
「あの芝生の上で踊っている連中と一緒にいるのもいいですね。」 255
ソールが叫ぶ。「ラルフは 完全に酔っ払つちまって
「もう 演奏することもできないんだとよ。」
「それならば 私がヴァイオリンを弾いてあげよう」シntaxが叫ぶ。
「彼の代わりが 十分務まればいいのだがね。
「若者たちよ 心配はいらない。きみたちは やがて 260
「ある美しい音色に合わせて 歩き出すことだろう。
「次には ちゃんとした拍子をとって

「その軽快な足で 緑の芝生を 蹴っていることだろう。
「そうすると 今度は 美徳が きみらの騒ぎを支配しているあいだに
「わたしの 陽気な調べに どうぞいらっしやな という段取り。 265
「また 美徳が きみらの喜びに微笑んでいるあいだ
「私は 喜んで 最高の腕前を披露できればと 願っているよ。
「私にとって 夜どおし きみらのヴァイオリン弾きになること
「それは 掛け替えのない 喜びなんだ。
「私は 性格・資格といういかなる点から見ても 270
「決して過ちは犯さない人物だとも 心得ているんだよ。
「私が 無垢な人々を活気づけているあいだは
「神様のご機嫌を害しているなど 決してありえません。
「このようにして 有徳な人物には 踊って 歌って
「天国へと行く権利が 与えられているのです。 275
「あなた方の陽気な歌声を 更に引き伸ばしなさい。
「そして その踊りに 歌をつけ加えなさい。
「そして跳ね回りながらも どうか
「きみらの気高い王様を称えて 大声で歌って下さい。」

農夫たちの合唱

鳴らせ 鳴らせ 豎琴を！ 目覚ませよ 鳴り響く貝殻を！ 280
幸せ者よ この谷間に住む 俺たちは！
幸せなり 王様の優しき配慮に 従う者は！
力ある領土と 遠くの海が 王様に従う。
慈悲深き神様 彼をあなたの最善の庇護のもとに！
彼を幸福にしてください 俺たちがそうであるように！ 285

このように 彼らはヴァイオリンを弾き 踊って歌った。
村全体は 無垢の歓喜で 鳴り響く。

最後には 遂に 味気なき真夜中がやって来て
喜びの一日を 静かな休息で 閉ざした。

第十八曲

^{グランジャー}
壮麗さには 赤面させよ。そして 考えさせよ。
多くの有色人種のなかで
道化師や与太者など まだら服を着た連中で
(彼らは常に **壮麗さ**の奴隷になって暮らしている)
いかに流行界が その衣服を飾ろうとも 5
期待した幸福を手にするものは殆どいない ということ。
壮麗さには 赤面させよ。赤面しながら 認めさせよ。
しばしば 農夫の田舎家を祝福する
かの純なる 安らかなる定めが
尊大なものには いかに知らされないかを。 10
清められた至福と 名状し硬き魅惑とが
その肥沃な農場を 飾りたてていることを。

快活な家族を眺めながら
シntaxは そのような思いに耽っていた。
彼らは 朝食の食卓の周りに座り 15
全員が一致して 彼の入場を 迎えてくれた。
同時に 彼らは皆 この敬虔なる客人が
己れの旅を再開する準備をして
グリズルを 扉に繋ぐよう命令したのを知り
一様に 大きな哀しみの気持ちを表明した。 20
「博士様 こんなにも早くお別れとは 本当に悲しうございます。」
この自作農^{ヨーマン}の友情溢れる胸の中から 言葉が弾け出た。

「でも 期待もしています。あなたが こちらへおいでの時にはいつでも
「ここがあなたのご自宅であることを お忘れにならないということ。
「ご覧のように 私に家族は 貧しい家族ですゆえに
「歓迎することだけが 私たちがすべき全てであると考えます。
「心からの歓迎です。必ず またおいでくださるよう。」
僅かながらの言葉が シンタックスからは 出ただけだった。

25

シンタックスは 再び 馬に跨がり
お別れを告げ 旅立って行った。

30

さて 自然の美が彼の目を捉え
華やかな簡素さのなかに 華麗な装いを見せていた。
そして 彼が道路を進んでゆくと
ブラック・バード 黒 鳥の囀りと スラッシュ 鶉の歌が
実に音楽的な そしてその土地ならではの陽気さで

35



博士の人格に敬意を表しているかに見えた。

周囲を見下ろす高所に登れば

様々に変化する風景が

目と心両方を惹きつけて

見る者の凡ゆる感覚を 魅了するのであった。 40

遙か眼下に広がる平野は 豊かな作物で覆われ

健康と芳香を 周囲に拡散させている。

他方で 高く聳える岩だらけの山には

一つの城砦が そびえたち

その権勢を誇った昔には 45

威嚇する敵たちの武器さえも 物ともしなかつただろう。

また 朽ち果てた住居の下を

迷路を描きながら 小川が流れている。

そして 嵐と見紛うような強風を受けることもなく

その静謐な流れが 谷間を潤している。 50

この谷間が 家並みの散在する村を活気づけていて

多くの 藁葺き屋根の家屋が 目の前に現れる。

凡ゆる家の扉の所では ある一群の者たちが 微笑みながら

貧困を知らぬよそ者に その悲しみを語って聞かせる。

敬虔な思いをし また目を落ち着かせて 55

シntaxは 魅惑的な光景を見渡しながら

感謝あふれる心地で こう語る。

「おお ^{ザ・オムニポテント}全能の神の 何たるご配慮ぞや。

「慈悲深き ^{パワー}万能のお方よ。それが あなたの贈り物だとは。

「我ら 瞬間の生き物に対して。しかし 60

「我らは あなたの賜物をいかに取り扱っていることか。

「我らの健康と 安楽とを一 あなたの最善の遺産と

「あなたが選んでくださる宝の山とを いかに台無しにしていることか

「我らは 誤って<快樂>と呼んでいる<愚行>を求めるばかり。

「そして 虚栄と作為の奴隷となって 65
 「心が持っている最高の感情の流れを 阻止している。
 「それにしても この場の光景は なんと 目をうっとりさせることか。
 「無視して通り過ぎることは出来ないし 決してそうはすまいぞ。」

そう言いながら 彼は ポケットから
 画筆と スケッチ・ブックを 取り出した。 70
 その間 グリズルは 満足した気分で
 忙しげに手を動かす主人の すぐそばに立っていた。
 その時に 雲なす埃が巻き上がり シンタックスには
 四頭建て馬車と思われるものが 近づいてきた。
 実際に それは四つの車輪を持っているはずであったが 75
 それが 何に最も似ているのか 言うのも難しかった。
 今は 次のように言えば 事足りるだろう。この馬車^{タフ}16は
 ロンドンで作られた。そこでは <四頭建て>と呼ばれる
 猫脚形の車輪が 今 流行っており
 その装備の風変わりさということで 名高いのだ。 80
 彼らは ひと月に一度 そこになだれ込む<突進者>たちであって
 貸主と御者たちを 震え上がらせる。
 途轍もなく壮麗な衣服に身を包んで
 夕食をとるために パブに乗り付けるのである。
 そこで賭博をし 酒を飲み 罵り合い そして— 85
 バラバラになって 帰途に就くのであった。

さてさて シンタックスは 一種の恐怖感を抱いて
 その馬車が近づいてくるのを 見ていた。

¹⁶ 原語は“tub”: スラング辞書には“a seatless carriage, an open truck”とある。(Eric Partridge, *A Dictionary of Slang and Unconventional English*)

そして 主人と同じように グリズルもまた
その光景に ひと方ならぬ恐れを抱いた。 90
というのも 長い鞭が 高速度で動かされるのを
彼女の目が捉えていたからである。
しかし この不幸な馬は 殆ど考えてもいなかった—
馬に対しても主人に対しても 降りかからぬよう
熟練した手つきで手綱を握る 95
その有頂天の若者が うち振るう その戯れ業を。
しかし 好奇心に溢れた博士は
その馬車の鞍敷くらじきの上に
気高い人の訪れを告げている
貴族階級の誇りを示す紋章を 見て取った。 100
いや 事実が明確に それを証明しているのだが
まさに その馬車を運転しているのは ある貴族であった。
というのも 地位ある人たちには よく知られていたことだが
貴族でさえ たまには 悪ふざけをし
下層階級の者たちと等しく 105
戯れごとに耽ることがよくあるのだ。
しかしながら この貴族が 彼の背中をめがけて
手綱を投げた時の 当のシntaxが感じた
凄まじい驚きと 痛い苦痛を
言葉にするのは 容易たやすいことではない。 110
そして 彼の鞭は 熟練したものであったが
グリズルの臀部にあたり その当たり所が悪かった
人間でさえ 身震いさせるに十分なもので
それを受けた患部は 常ならぬ動きをしたことが 見て取れるだろう。
彼女の怒りは その両の目に現れ 115
そうして 彼女は 狂ったようにいみな嘶いた。
彼女が 最初に かのトランペット兵を

血^{なまぐさ}腥い戦場へと運んだ時は まさにこのようであった。

そのときは あまねく拡散する戦いへの熱のなかで

彼女が 騎兵隊全員を 一斉突撃へと導いたものだったが。

120

こうして 彼女が平地を駆け回るあいだ

シntaxスは 教訓的な調べに耽っていた。

「この邪^{よこしま}なふざけ行為のなかで 私は

「この貴族を この育ちのよい紳士を 判断することが出来るだろうか。

「むしろ 美德は このような高い身分の 称号を持った道化師には 125

「眉^{ひそ}を顰めるのではないだろうか。

「かように 貴族が 道化を演じるだなどと。

「私の貧しい学校だったらば

「もし 子供たちのあいだで こんなことが生じたら

「そして 彼らがこんな猿真似をやるとしたら

130

「彼ら自身が 痛い代償を払うだろう そんな行いなのだ。

「そして 私は 黒幕の子供を 厳格に鞭打つであろうに。

「しかし 今は この野蛮な まぬけな貴族に

「一言 言葉をかけるのも もったいないわ。

「私は 他にすることがあるからね。

135

「それにグリズルが。ああ グリズルよ お前はとうなったのだ。」

ある農夫の納屋が近くにあり たっぷりと食料も積み込まれて

それが グリズルの注意深い目に飛び込んでいた。

その納屋では 香りのよい干草が 沢山の束となって

思慮深いこの馬を 立ち寄るよう 誘惑していた。

140

その間 不安な気持ちでいっぱいこの馬の主人は

今しがたの災難ごとを冥想しながら

心配で胸が塞ぎ 緩やかに歩みを続けた。

そして 「誰が 私の馬を奪ったのか」と思うだけであった。

実際に 彼が恐れたのは 彼女が どこか農夫の屋敷の囲い柵のなかに 145
繋がれているのではないか ということだった。

だが すぐに 彼は 己れの<四足獣>が

干草と藁屑のなかで 腰帯まで浸かっている姿を 発見した。

一方で 隣の農場を所有している男が

その力強い腕を持ち上げて 150

盗人行為を目撃したというので

右や左に 鞭を振りかざす準備をしており その意図は

(悲しいことに それは否定しようもないことだが)

グリズルの皮革を 強く打擲ちようちやくすることであった。

シントックスは その彼の過酷な意図を察知した。 155

「罰するのを控えてください」そう彼は叫ぶ。

「その馬が なぜ 懲罰の鞭を受けなければならないのか。

「本人は 悪いことをやっているなどと つゆとも思ってもいないのです。

「私の腹立ちも お許しください。真実を言えば

「このイギリスの土地— 160

「正義で名高いこの国を歩む人の性格には

「そのような仕打ちは 似合いません。

「彼女が台無しにした藁屑と

「彼女が食べた干草すべてに対しては 私が代金を払いましょう。

「どうぞ よしなにお取り計らいください。 165

「費用を言ってください そして打擲をお控えください。」

ここで 農夫は 魔法にでもかかったように
持ち上げていた腕を 直ちに下ろした。

「正当化も出来ないようなことを やるところでした」彼は叫んだ。

「どうぞ ご容赦ください。 170

「この性急さに関して 私は 償いをしましょう。

「どうぞ 旦那さま 仲直りしましょうよ。」

「あれが 私の家ですが よかったらいらして下さい。

「お〜い トーマスよ 博士の馬をお連れしろ。

「どうぞ 尊師様 ご案内いたしましょう。」

175

博士は 従わない訳でもなく

すぐに この農夫の家族全員に

歓喜の思いで 迎えられた。

そうするうち この正直者の亭主は

その日の仕事を残しており その場を立ち去った。

180

そこで シンタックスは 何か面白いものはないかと

あたりを見て回ろうと考えた。

その時に 見よ。搾乳所が 彼の目を捉えた

そこは クリームが満杯で そして秩序正しく

フライパンと鉢と水差しが 置かれていたが

185



尊師は どうしても それらを味見したい誘惑に駆られた。

しかし そこで 彼は それよりも良いものを発見した。

若くて 美しい 村の乙女が
彼の目を惹きつけ つい賞賛の思いが湧いてきたのだった。
彼女のほうは 彼が入ってゆく時と ため息をついていた。 190
さてさて シントックスは 我ら皆知っているように
ため息や 哀しい身の上話を聞くと
直ちに みずから 救済を申し出て
涙を乾かし 悲哀を和らげることを 望む人だった。
「可愛い娘さん どうぞ こちらへ。」彼は 静かに言った。 195
「どうぞ 心配せずに あなたの悩みを告げて下さい。
「こちらへ来て 私の横にお座りなさい。」



「私を 親切な道案内人とお考え下さい。
「あなたの悲しみを告白して 真実を語って下さい。
「何を悲しんでおられるのかな。ある若者が 200
「約束を反故にして あなたを欺いては
「愛情のお返しをしてくれない そういうことでしょうか。
「確かにそうでしょうね。分かりますよ。しかし目を上げなさい。
「可愛いお嬢さん 私を どうぞ信じて下さい。」

「私は 心底から 共感の気持ちを持っている者です。 205

「もう一度言いますが その悲しみを分け与えてください。

「私の心では あなたの悲しみは 他人事ではないのです

「と言うのも 報われない愛ゆえに悲しむ人たちの

「その心の苦痛は 私には 十分分かるからです。」

愛が語られているのが聞こえて 210

更に耳を傾けていた母親が 彼のその言葉に火をつけられて
突進してきては 怒りの感情を爆発させた。

「何たることでしょう。重ねた年齢が

「あなたの頭を白くしているのに あなたの目が

「邪悪な思いで輝いているのが 私には見えます。 215

「立ち去ってください。老人は。ふしだらな山羊¹⁷さんは。

「あなたの心は その上着と同じように 真っ黒なのですね。

「しかも 教区牧師さんですって。おお 神様

「私たちの住む この邪悪な時代を お許し下さい。

「私の正直者の夫のところへ行って 220

「この家に 一匹の蛇が潜んでいると 訴えましょう。

「夫ならば このような偽善者には それなりの仕打ちをすることでしょう

「それ請け合いますわ。」そう言って 彼女は飛び去って行った。

主人が現れたが その時までには

ナンシーが 勇気を出して その不安が誤りであること 225

また 彼の犯罪も見当違いであることを 告白していた。

そして 母親は 今は 怒鳴り立てるのを止めていた。

そうして 粗雑な怒りは 歓楽へと変わり

彼らは 博士の高潔な人格を 一様に認める。

¹⁷ 原文は“goat”：「山羊：早熟で、好色・淫乱の象徴；また悪魔が goat の姿をとると言われる。」(『ジーニアス英和])

やがて 食卓に 夕食が準備され 230
グリズルは 厩で 夕食を食べる。
快活になったシントックスは もう一度
それまでの不幸な事件と苦痛を忘れた。
そして 夜になると 歓迎のベッドに
心安らかに 頭を憩わせた。 235
しかし 彼は 疲れた手足を そのまま
眠りに委ねる訳にもゆかず
常に 住む場所が見出される天の奥御殿へと
祈りの言葉を差し向けるのを 忘れなかった。

第十九曲

陽はまた昇る 華やかに。
「ようこそ 輝く天体よ」博士は叫んだ。
「あなたは 遠くの山を 輝かせ
「下方の谷間の 霧を晴らす。
「おお 壮麗な火に 輝けと命じる 5
「聖なる全能者を 我に 称えさせよ。
「成長するものと 生きているものすべてに
「暖かい精気をお与えくださる そのお方を。
「それこそが 大地の腸はらわたのなかで
「豊かな鉱石を誕生させ 10
「または 密やかな鉱山を貫いて
「ルビーを赤く染め ダイヤモンドを輝かせる力なのだ。
「また 一方で この大地という舞踏会で息をする
「万物の最初の者であり また長である人間は
「その光を受けて その短い時間を過ごし 15

「姿を消してゆく 昆虫の種族と同じように
「自由に その力を感じている。
「おお 何という美しい光景が 我が目に突きつけられることだろう。
「そして 明けゆく一日が 広範な光景の上に
「その力を 誇示する時に 20
「この心は 何たる喜びで浮かれ騒ぐことだろう。
「こうして 光景を眺めるだけで 私の目は
「変化に富んだ豊かな富を 飲み込むのだ。
「光の輝きが 向こうの塔を照らし
「木陰のなかの影は 何たる深みを持っていることか。 25
「枝葉を広げる檜の木と楡の木のあいだ
「その輝きが その間を 貫き通す。
「目も眩むような煌きよ。お前たちは クロードの画笔か
「或いは ティツィアーノの手つきを 要求するであろうな。
「こうして 私が遠くの丘を眺めているあいだでさえ 30
「その光沢ある色彩は 青色へと変化する。
「その銀色の波のなかに 詩人ならば
「川の妖精たちが 水浴びをしている姿を思うであろうが
「その流れは 木陰のなかに消えてゆき もやは
「緑の樺の木の間を流れている姿さえ 見えはしない。 35
「しかし 瞳を凝らして その水路を辿れば
「再び その流れは 目のなかに光を届ける。
「そうして 流れゆきながら
「岸边に咲く花々のすべての姿を 映し出す。」

「素敵なことだ この愛すべき窓は。ここでは 光景のほうから 40
「求愛しては 楽しみなさいと 要求するかのようだ。
「また 気前の良い自然が 誇りとして統治している
「あの丘に登り また この平野を歩め と。

「かの パラディオ式芸術の窓¹⁸—

「それは 芸術家が机上で設計したおかげで

45

「砂利道と 芝生が刈られた緑地以外



「他のものは全く見通せない かの<窓>—

「とても ピクチャレスクなどとは言えない代物!

「そのような<窓>とは とても似つかないものなんだ。

「この美を 無視していたら

50

「また この見通しの良い景色から

「何か可愛い光景の一つや二つ 選んで描かなければ

「私の義務を 実行したとは言えないだろう。」

「一面 白く塗られた 田舎家があり

「扉のところで 子供たちが遊んでいる。

55

¹⁸ 原文は“the windows of Palladian art”。“Palladian”:「<建築>パラディオ式の< A. Palladio に代表される 16 世紀イタリア・17-18 世紀英国の建築様式>」:“Palladian window”:「パラディオ式窓<中央に広いアーチ型の窓、左右に狭い矩形の窓を配置した大きな窓>」(『ジニアス英和])

「一人の農夫が 潜^{くぐ}り戸にしがみつき

「蔦^{つた}が 茅葺^{かやぶ}き屋根を 覆っている。

「また 丘の斜面には 分厚い雑木林が続き

「小川の上に 緑の葉陰を投げかけている。

「その流れは 忙しく動く水車を 突き動かしている。 60

「快活な群れをなし それらが結びついては

「私の画笔に まさに相応しい光景を呈しているではないか。

「また 緑地を隠し その上から

「先細りの尖塔を見えさせている あの美しい^{にれ}楡の林をも—

「その楡の木の枝葉が作るスクリーンをも 見逃してはなるまい。 65

「それ以上は 付け加えるものはなさそうだ。我が心の目には

「この風景は完璧であって 構図も申し分ない。

「人によっては あの泥水のなかで転げまわっている

「豚の群をも 絵の中に挿入したく思う者もあるだろう。

「私自身は 豚は 食事用に準備されて 70

「皿のうえに乗っているときは よいものだと考えるけれど

「敢えて言わせてもらうならば その獣は

「絵画における私の^{テスト}趣味には 決して合わないのだ。

「そして 厳粛な気持ちで 断言したいのだが

「優雅さなり上品な性格なりを 軽くあしらう者は 75

「^{テスト}純粋なる趣味の世界から 大きく逸脱しているに違いない。

「私のこの古い^{かつら}鬘の中には

「豚について発見されるのと同じ位のものしかないのだ。

「と言うのも 真実を言えば

「^{ラフ}荒々しいもの以外は 何も求めず 80

「また 自然は十分に^{コース}粗雑であるとも思わないような

「その質のピクチャレスク精神など 私は受け継いではいないからなのだ。

「そのような体系は ^{たて}藜草一本のなかにでも

「優雅さを見る 私の天分を 傷つける。

「私の目は もつれて育つ^{きいちご}黄苺のなかに また野ばらのなかに 85

「ピクチャレスクを見て それを称えるのだ。

「と言うよりも 朽ち果てて腐ったような樹木に

「真実の美を見るのだ。そして それらを見るに付け

「技巧^{アート}が飾り立てるのを 忌み嫌う者である。

「そして 次なる規則からは 決して 私は逸脱することはない— 90

「つまり 母なる自然の 広大なる収集物のなかから

「幸福な^{コントラスト}対照で結び合わされて

「素養があり また判断力がある人々を喜ばせるような

「美しい かつ^{ふさわ}相応しい選択をすること— そのような規則からは。」

しかし 見よ。扉のところに 農夫が現れ 95

大声で 午前8時を宣言する。

そうして シントックスは 慌てて階下へ降りてゆき

親切なる 待ち望む友人たちに 合流する。

「ところで 尊師様」主人は言う。「もう一日

「ここに滞在なされることを 強く望んでいます。…」 100

「有難いお申し出に 感謝します

「でも それは無理です。」博士は言う。

「まだ 行かなければならない 大変な旅が残っており

「もっと多くを見て もっと多くを知らなければならぬのです。

「実際に これまで 彷徨を続けなければなりませんでしたが 105

「あと二週間あっても これだと 家にたどり着くことが難しい気がするのです。

「あなた方の 誠心誠意のお心尽くしに感謝しながら

「お別れを告げ 我が愛馬を求めます。」

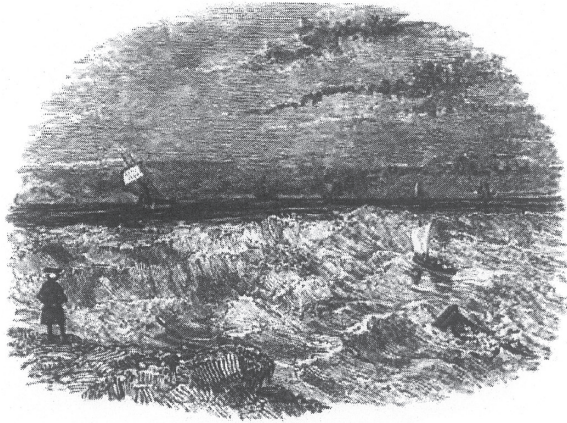
すると グリズルは 直ちに発見された。

そうして この善良なる人たちに囲まれて 110

シントックスは この 自分の愛馬の美德について

話しておくことが適切だと 考えた。

また 彼女が耳と尻尾を失ったことを
嘆き悲しむ一方で 彼女が 並み居る馬以上に
彼に尽くしてくれたことを 115
細々と 詳しく語ることをも 忘れなかった。
通りすがりの人達にとっては
彼の愛馬は 冗談の種を作り上げるだけだったが—
また 邪悪で悲しい災難というものは
得てして 当事者の意に反する笑いを強要するものであるが 120
この冗談と笑いは 彼が 己れの身を落ち着かせ
また 厩を確保することが出来ても 去りゆこうとはしなかった。
そうなのだ 彼は 一人で 哀れなグリズルが 飢えないようにと
草を狩り それらを切り刻んだものだった。
このように 詳しく 自分の身の上話を 語りながら 125
馬上の人となっては
そこで しばらく 腰を落ち着けながら
遂に お別れ話に ケリと付けた。
彼は 愛撫するのは避けるのが 最善と考え
キスは与えずに 祝福の言葉を与えた。 130
家のこと 書物のこと 名声のこと
博士は 進みながら そんなことを熱心に 考え込んでいた。
夜になると 彼は 書類の山に目を通し
獲得した知識を 更に そこに付け加えた。
しかし 次の朝 別の光景が— 135
流動する緑色の 広大な広がり—
大洋そのものが— 彼の目のまえで 弾けた
言語に絶するような 堂々たる威容で。
それを眺めていると 数尽きない帆船の群が
その白い帆を 突風に差し出して 140
荷を積んだ 多くの船が



財宝を イギリスの浜辺へと 運んでいた。
その時に 賞賛と感嘆で 己れを失いながらも
湾曲する海岸を 目でたどるうちに
遠方の風景のなかに 聳えたち 145
天空の青色を通して 半ば 目に見えて
ある都市の 厳かないでたちが 出現した。
岸辺には 光輝く尖塔を伴って
建築群が 立ち上がり その下では
マストの群れが 一つの森のように 育っているのが見えた。 150
それは リバプールの町だった。帝都ロンドンに
比肩する町。壮麗なる^{いち}市。
そこでは 蛇行するマージー川¹⁹が 急速に流れ
管れを テムズ川と 競っているのだ。
そうして この川は 潮の流れが打ち寄せるたびに 155

¹⁹“the Mersey”: マージー川<イングランド Derbyshire 州北部から、Liverpool を通りア
イリッシュ海に注ぐ>。(『ジーニアス英和』)

ユマース

商業が 供給するものならば いかなるものでも

また 風が その上を吹き抜けるものは何でも

凡ゆる国から 凡ゆる遠くの浜辺から 運んでくる。

海岸を歩くながら このように考え込んで シンタックスは

海と陸が織り成す この風光明媚を 楽しんだ。

160

しかし 今度は 更に近くに 町が現れると

人間たちの騒音が 彼の耳を捉える。

そして やがて この騒音を搔^かき潜^{くぐ}り

彼は ある旅籠の安楽を 探し当てた。

彼は 食べて 飲んで パイプを吹かせた

165

そして 家主と 古風な冗談を交わした。

しかし 眠る前に 己れの旅行記に少しばかり付け加えながら

一時間ほどを 過ごした。

それから 己れのベッドについて 翌朝が

新たな思いを加えて ページを飾るだろうと 期待した。

170

朝が来ると 彼は 突撃するかのように 外に出る

朝の空気を吸い 周囲を眺める

そして彼がどちらへ向かおうと 彼の五感のすべてが

前に伸び広がる 豪華な光景を 掴^{つか}まえる。

すべてのなかに 彼は 貿易^{トレード}が齎^{もたら}す

175

誇り高き壮大さが 展示されているのを見る。

シンタックスは 慎ましい学者として育ち

頭のなかには 学問以外の何も詰まっていたはいない。

実際に 古典に対する造詣は深く

心には 善良さが支配権を握っているが

180

しかし 一年に40ポンドが

彼の固定した収入と呼ばれるものであった。

そして そのために 安息日が来るごとに

8マイルも旅して 説教し 祈りを挙げるのだったし
経営する学校も 殆ど利益は ^{もたら} 齎さず 185
彼の苦勞に報いるものも 殆どなかった。
正直を言えば その報酬は 飲み物 食べものには 事欠かず
パンと 肉を 供給してはくれていて
また ^{おおかみ} 狼を屋敷には入れないようにしてはくれたのだが
それでも シntaxは 非常に貧しかった。 190
なる程 細君は なんとか 上品に見せる
衣服術は心得ていたのだが
善意の男である博士は 常に 上着の数はわずかで
質素な風貌で 知られていた。
尤も 彼は 学者的な雰囲気と 学者としての誇りは 195
常に 決して 手放しはしなかったのだけれど。
こうして 彼は この豊かな場所の大通りを
いつもと変わらぬ優雅な態度で 闊歩した。
そして その富が まるで己れのものであるかのように
街を 歩き回った。 200
しかし 己れの財産については ホラをふくことも出来ずに。
つまり 12ギニーと 一枚の紙切れ—
(高貴な閣下の あの贈り物)
それだけが 彼の懐が提示できるすべてであった。
尤も 彼の上着の裏地が まだ 205
かの郷士ハーティの小切手を 密かに隠していたのであるが。
そして 今は その小切手を
現金に換えても いい頃だろうと考えた。
そこで 朝食のテーブルに着きながら
社交的に ありふれた会話に加わりながら 210
この機会を利用するかのように 皆に お伺いを立てた—
「どなたか 私の願いを聞き入れて

「私の請求書に対する代金を お恵みくださるよう

「心からの願望を 満たしては下さらぬか」と。

すると 巫山戯たような若い 銀行の事務員が
尊師に刺激を与える質の悪ふざけを 決意して
<証券取引所>で 商人たちの列に 並ぶよう
彼に 助言した。

215

「多分 ロンドンのご友人に 支払いの代金を送るような

「そんなことを望む人たちも ここに居るでしょう。

220

「その人は あなた様のご依頼に賛同されて

「小切手を受け取り 現金で それを支払ってくださるかもしれません。」

さて 床屋が シンタックスに銕を入れ

彼の3日に渡って伸びた顎鬚を すぐに 泡立てては剃り落とす。

彼の鬢—それは 彼が旅に出て以来 一度も

225

櫛を入れたことはなかったが—は

フリッス トゥワール
縮れさせられ 巻かれて

搔き回されては 整えられて 巻き毛になる定めとなった。

長い間に錆状のシミが付着した上着は

すぐに それらのシミも取り除かれ

230

深靴もまた 光沢が付けられ 新鮮なものになった。

それらは すべて 博士の厳格なる指令によるものだった。

さて 気持ちも新鮮になり 陽気になって

証券交換所へと 彼は 足を速めた—

この商業都市において

235

自らの ささやかな商談を 試みるために。

やがて 証券交換所が 彼の驚異の的となった。

そして その建物がまた 彼の心を 歓喜で満たした。

「これ 貿易を行うゆえの その成果なのだなあ。

「学問だけでは」彼は叫んだ。「こんな学園は 建てられはしない。

240

「実際に 今 私には 次のような考えが浮かんでくる—

「(誠心誠意 そう考えているのだと 言ってもよいが)

「<聖書>の中に こう書いてある。

「テュロスとシドン²⁰ は

「世界の凡ゆる都市を凌ぐほど 豊かな町であり 245

「そこでは 船舶の群が 風に靡^{なび}く帆を広げ

「その商人たちは 食べ物にも 飲み物にも

「豊かさという点で 世界の先陣を切り

「偉大な貴族にも勝る金持ちであって

「その威容を 王侯・貴族たちと競い合っていた と。 250

「しかし だ。 如何に彼らが権勢と規律を誇ろうとも

「彼らは リヴァプールのようなく証券取引所<なる学園には

「行ったことはないと 断言しておこう。」

彼は 中に入ってゆく。 轟^{ひし}めきあう

その市^{いち}には ブンブンと唸^{うな}る騒音が聞かれ 255

雑然とした響きがあり 熱烈なる利益欲と

忙^{せわ}しげな取引を歌う 恋^{セレナード}歌がある。

そうして 彼の貫くような眼差しが

投げかけられると その目は そこに

その華奢^{きゃしゃ}な 微笑む顔になかに 260

親切心が刻まれたような輪郭を辿ることができる

一人の男を 探り当てた。

そして その腹が 胸から突き出ている

その男に 話しかけた。

²⁰ 原語は“Tyre”と“Sidon”。“Tyre”：「テュロス、ティルス。古代 Phoenicia の港町；古代の大都市の一つで航海者と貿易業者の活躍で有名。」“Sidon”：「シドン。古代 Phoenicia の港市；エーゲ海交易で繁栄し、Tyre と覇権を競った。」(いずれも『ランダムハウス英和])

彼は 善意に溢れた男のような感じがして 265
博士の求める まさに適確な男だと思われた。
そして 気取りも何もなく上品に
彼は その男に 己れの事情を打ち明けた。

「この紙切れを よーく ご覧いただけませんか。
「多分 あなたならば 拒みはなさらんでしょうな。 270
「あなたのご配慮を是非とも頂き 私が望むお金を与えて頂きたい。
「この小切手は結構な代物で 誓って言いますが
「ある貴族のお方からのプレゼントなのです。」

商人

「それは真実でしょうな。でも 貴族とかいう人たちは
「ここでは 殆どクレジットの支払いはなされないものです。 275
「その小切手は 見ただけで 正当なものだというのは分かります
「そして それが貴族の方というのも。でも あなたはどなたかな？」

シンタックス

「よーくご覧あれ。あなたが見ての通りの正直人間ですぞ。
「神学の博士です。
「その言葉が 私の保証書です。そして 人も知るように 280
「己れがこれと認めない行為は 絶対にしない そんな男です。」

商人

「何も言うことはありません。恐らく仰るとおりでしょうな。
「しかし あなたには保証人はござらぬか？
「博士殿 あなたが主張なされることを保証する
「どなたか 友人は おられませんですか。」 285

シンタックス

「いいや 誰もおりませぬ。この町の
「この界限では 私は異邦人ですゆえに。」

商人

「それで あなたは リヴァプールまで 誰か善良で
「哀れな馬鹿者を探すために 来られたのか。
「あなたのような学識と 地位のあるお方が 290
「遙か 北国においでになって 私たちが
「蟹の鉋でちょん切られるほどの
「そんな知恵しか持ち得ないとお考えか。
「学問があるとは 我らは 主張できないのですが
「しかし 先生 我らにも常識っていうものがございますよ。 295
「学識ある人たちを 我らは探しているのではないのですが
「ここで 自由にものを言わせていただければ
「あなた様を まさに 一人のギリシャ人と見なしたいのですが。」

シンタックス

「ギリシャ語なら 知っているよ 私は公言出来るよ。
「ギリシャ語は 私の喜びであり また幸福でもあるんだ。 300
「妻が 私をベッドへと誘うようなとき
「私は しばしば 夜通し 頭痛を感じながら
「ホメロスの書物を 読んでいたことがあるよ。」

商人

「ならば どうぞ ホメロスに向かいなさい そしてお望みならば
「彼が あなたの手形を 値踏みするかどうか 尋ねてご覧なさい。 305
「ああ 時計が時刻を告げました。 さようなら 罪深い先生。
「夕食を取る時間ですの。」

「あなたは お金が入り用なのでしょう」別の男が言う。

^{あごひげ}顎鬚を生やした イスラエルの兄弟であった。

「その手形は疑わしいと思いますな。 310

「しかし あなたは貧相に見えます。私は親切な男で

「ここで 有益な取引なる機会を設けませんか。

「その小切手は 20 ポンドとなっております

「言うまでもなく 私には高額すぎます。

「でも それを私を買取りましょう。さあ 5 ポンド受け取りなされ。」 315

「待て待て。驚いたものだわい。」博士は言う。

「これが 取引なる仕事が自慢し 誇りにするものなのか—

「彼らには分かっていないかもしれないが それぞれを

「矯正できない詐欺師のように 取り扱うだなど—

「そして 己れの利益のみ考えて 320

「卑しい恐喝者を演じるだなんて。

「商業よ もはや 汝が獲得する利益を 羨むまいぞ。

「汝の 苦しみを代価とする富 汝の黄金を産む苦役を。

「(名誉という 聖なる機能が働かなくなるところでは

「(容易く^{たやす}獲得されるとは言え 苦しみが代価となるには 変わりがない。) 325

「それらは 汝の崇拜者が嵌まり込む危険物であり

「彼らは それらを取り消そうとしては 自ら破滅するのだ。

「また その飢えた胃袋は <はした金>の山を

「美味しいご馳走とみなして 毎日 燃えている。

「仮に 商業に 美徳 才能 知識 健康などがあるとは言え 330

「それらも 常に一つの言葉—<^{ウェルス}富>—に収斂する。

「そして この人生の壮大さを形成するのは

「まさに 金銭闘争という 誇り高い光景なのだ。

「しかし 金持ちも貧しい者も それなりの財貨があるとは言え

「最後には 共通したお墓を 発見するだけなのだ。 335

「恵み深き天よ 願わくば 私には
「ものを感じる心と 貧困を 与え続けたまえ。
「ここにいる男どもは 私を 貧乏ゆえに 軽蔑する。
「しかし しかし 惨めな人たちは 我が扉を求めてくるではないか。
「私には 恐れるべき借金取りもいないし 借金もありはしない 340
「そして ギャゼット²¹に 震えることもないのだ。
「もし そのページが 私の名前を公示するとしたら
「私の大きな利益になるだろうし 私の名声にも繋がるというものだ。
「これらの 誇り高き商人たちに 私と同じようなことが言えるだろうか。」
もっと多くのことを 彼は言ったが 今や 教会役員の一人が 345
大きく鐘をならし 重たい扉を閉める時刻でもあるので
善良な人々は 直ちに 帰宅するでしょうと告げた。
しかし シントックスは 耳を傾けていない状態であり
従って 男は 彼の耳元で鐘を鳴らした。

シントックス

「いやはや 友よ。 こんなにも激しく鐘を鳴らして 350
「一体全体 何の騒ぎなのかね。」

教会役員

「鳴らして あなたを目覚めさせるのです。」

シントックス

「私は いつも 私を招き入れる鐘の
「大きな音を聞くのには 慣れているのだが。」

²¹ 原語は“Gazette”：「(主に英) 官報、官報での公示。＜英国では the London [Edinburgh, Belfast] G ~ の3つがあり、週2回発行で公職への任命・破産などを公示する。』（『ジーニアス英和』）

教会役員

「ただ 私が言いたいのは そしてあなたに知って頂きたのは 355
「あなたが いらっしやらなければ 門を閉めますよ ということだけです。
「そして 困っただけのあなたを 見捨てることになるでしょう。
「今は 尊師様 あなたは教会にはいらっしやられないのですから。」

シンタックス

「実に 友よ。きみは 本当のことを語っている。
「きみと同じように 私にも そのことは分かっているよ。 360
「ここは 寺院ではない。また 明らかなのは
「ここには 何らの両替屋も 存在しない。
「そして ここが <盗人の洞窟>言われるような
「そんなことなど 私の心に言わせはしないでしよう。
「しかしながら 私は この<金銭亡者>たちのところを去ります。 365
「そして 私の<紙切れ>は 大事に取っておく積りです。
「もやは 彼らに このシンタックスを 笑わせはさせまい。
「グリズルと私は すぐに ここを離れます。
「我を生んだ星たちに感謝！ 私には
「私の凡ゆる願いに付き添ってくれる 370
「あの黄色の 有益な代物—現金を十分に持っている。
「それが 私の旅の終着点へと 私を運んでくれるのだ。
「町に着けば 我が気高い閣下が
「私を歓迎し ベッドと食卓を準備してくださる筈だ。
「そうして これらの取引詐欺術などを報告すれば 375
「閣下は きっと喜んでくださるだろう。
「如何に私が 騙されかけたか 閣下の由緒あるお名前が
「いかように取り扱われたか—そんなことなど 報告してみようか。」

第二十曲

このように博士が話しているときに 群れ集い
歯を剥きだしている群衆のなかを 一人の人が通り過ぎた。
流行の服装で完全に身を包み
青いコートと 紐をかけたチョッキを着て
周りの者たちよりも 身分が上に見える男だった。 5
彼の小さな衣服は ぴったりと身体を締め付けており
彼の靴は 黒玉のように 黒く光っていた。
そして 金ピカの拍車は 鋼鉄の支えが施され
両方の踵かかとの上で 輝くのが見られた。
紋章が詰められ また紋章が散りばめられて 10
時計の鎖が 彼のポケットから垂れ下がっていた。
微笑む顔の上には 帽子が深く被さっており
髪の毛を刈り込んだ頭を 殆ど隠していた。
彼は 鞭を振り 大通りを 忙しげに通る
彼の友人たちに 挨拶を送っていた。 15
彼が 通り過ぎるとき 怒りの念で一杯に満たされた
シntaxが その現場に現れたが
彼は それでもなお 群衆の喜ぶ顔を見たさに
大声で語り続けていた。

上品な身なりをした男は そこで立ち止まり 20
シntaxを 怒らせたものが何なのか 知ろうと思った。
そして 快活な 有愛あふれる面持ちで
その立腹もとの種がどこにあるのか 教えてくれるよう依頼した。
かくして シntaxは頭を下げると 二人は 歩き続け
見知らぬ者同士 かような会話を続けた— 25

シタックス

「これら 商人の方たちを どうも 私は 理解出来ませんなあ。
「思うに あなた様は 郷士のお一人かと。」

_____氏²²

「私は (ここで冒涇とも見なされる言葉が出る) 本当のことを申し上げますれば
「両者を合わせたもののかげらとでも言うべき人物です。」

「つまり 今 あなたがご覧になっておられるのは 30
「商人であり また 郷士でもある人物です。」

「ここでは 私は ある重要な地位にいる者でもあり

「_____という名前²³で 人様には よく知られています。」

「そして この町の界限では 実質的に

「私以上に 名が知られた者は 殆どいないでしょう。 35

「私の商売の事務所は この大通りにあります。そして

「2、3マイル離れたところに 私の屋敷があり

「そこには 田舎が誇る魅力のすべてが整っており

「私は 常日頃 そこに住み着いています。」

「そして あなたが 私よりも良い生活をしている貴族をご覧になるとしても 40

「それは _____という名の私以外には有り得ないでしょう。」

シタックス

「おやおや とんでもないことですぞ。あなた様。 私は

「仲間のキリスト教徒が 乱暴なことを言うのには 我慢なりません。」

「そのような冒涇は いかなる立場の人であろうと

「邪悪な策謀であることを 十分 知らなければなりません。 45

「そして それが 商人の方にてあれ 郷士の方にてあれ

²² 原文は “Mr. _____” と、空白になっている。

²³ 前の注と同じく、ここも原文では空白になっている。

「いずれにも 天の怒りを 引き下ろすことになるでしょうよ。
「そして 私が そのような言葉を聞くところはどこであっても
「それを阻止するのが この法衣を着ている私の努めなのです。
「私は 貧しい牧師にすぎません—とても 貧しい— 50
「私は 学校を経営しており 教区を保持しています。
「しかし 私が その教区教会に居るとき
「或いは 家で 樺の鞭を振るうとき
「その両方の立場が持っている権力に伴う
「高い威厳というものを 私は知っている積りです。 55
「そうして そのようなことを いつも 心に抱いています。
「そうです あなた。それらを維持していると言ってもいいでしょう。
「あなたの証券取引所では 富が支配していますが
「そこでも 私は その威厳を維持したところです。
「その誇り高い場所では 時々 驟雨のような黄金が 60
「天から降ってくると 聞かされました。
「しかし ジュピターのことを読んでも そんなことはありませんし
「仮にあったとしても それは愛のために 注がれていたものです。
「それに似たようなものは ここでは 全然見当たらないし
「愛もありませんし また正しい礼儀なるものも 見る事が出来ません。 65
「で あの男が 私を正面っから愚弄した時は
「私が求めていたのは ただ 人間が共通して持つ思いやりの心でした。
「その時に 仮に 私が 名うての詐欺師でしたら
「彼は 私の丁寧な申し込みを あれ以上の軽蔑的な態度で
「迎え入れることなど 出来なかったでしょう。 70
「実に 私は 邪悪さ極まりなき形で 取り扱われたのです。
「そして 取り巻くガサツな連中のなかで
「一人の間抜け男によって 冗談の種にされたのです。
「こうして 私は トルコ人 異教徒 そしてユダヤ人により
「何か訳の分からない 混沌状態おとしいに陥れられたのでした。 75

「で 今こうしてあなた様と 偶然出会えたこと 誠に有難いことです。

「いいですか 私は 育ちの良い 完成された紳士を

「見分ける術は 十分に持っている者ですぞ。

「従って あなたの前に 私の正直なる身の上話の

「一つか二つ お披露目致しましょう。

80

「私のやっているこの旅の目的は

「主として ある利益を求めてのそれなのです。

「同時に 私の名前が それによって

「文学的な名声を 獲得するかもしれない ということなのです。

「もし よろしければ いずれ 私が計画している書物のうちで

85

「完成した部分があれば ご一読頂きたいと願うものです。

「ある高貴な方が 有り難くも 私の保護者になって下さり

「また 友人にもなって頂けるとのことなのです。

「私は つい先ごろ ヨークの美しい地方で

「その方にお会いし 恵みを頂ける当の人物になりました。

90

「この小切手は まさにその方に相応しい思いやりのお気持ちと

「満面にお人柄の良さをたたえられた その微笑みと共に

「私の手に 静かに手渡して下さった代物です。

「その方は 大した金額ではないけれど・・・そう言われました。

「もし 私が 町でその方を訪問することが出来るならば

95

「彼は 私たち二人の友情を 更に世に広められることでしょう。

「ああ しかし ここでは 私は それを現金に換えるのに

「余りに 性急過ぎたようです。

「そのために 私と この偉大なるお方は 一緒になって

「この粗悪な群衆の 嘲りの種となりました。

100

「あなたにお願いがありますが これら 財布だけを自慢する

「この商人たちを滅入らせた この紙切れをご覧頂きたいのですが。

「必ずや あなたは この紙切れの価値全体を ご理解なされる筈。

「また 多分 その我が閣下を ご存知かもしれませんな。」

_____氏

- 「彼のこと よく存じ上げていますよ。この手書きの文字も。 105
「まさに これは 閣下ご自身が書かれたものです。
「現金を差し上げましょう。いやはや
「私ならば いわば500ポンドくらいを 求めるでしょうね。
「彼は 偉大な識別力をお持ちの 貴族で
「彼とのお付き合いが あなた様の学識の豊かさを証明しています。 110
「彼は 由緒のあるお名前のゆえに 名高いのではなくて
「全くの個人的なご性格の魅力ゆえに 名高いのです。
「まさに 高貴な種族を飾る
「上品さと 思いやりのある ご性格のゆえなのです。
「私と一緒に いらっしゃいませ。あなたに もうひとりの商人を 115
「少なくともあなたの心に合致する一人の人を お目にかけましょう。」

- シntaxは 今や 怒りの顔つきを和らげ
すぐにも 己れの書物を見せる準備をしていた。
が 程なく 彼は 美しい部屋に 座席を取った。
そして 注意深い配慮が 彼に なされた。 120
彼らが 昼食の席に 座っていると
10分が 親しげな会話に 瞬く間に費やされた。
その後 仕事の手筈が整えられ
取引がなされ 小切手は 交換された。
そして 博士が 己れの紙幣を 125
上着の 小さな内ポケットに 仕舞おうとすると
「そこに」と郷士は言う。「そこに 別のものがありますね。
「私が それを その兄弟とでもいうものに 引き合わせましょう。
「イングランド銀行が その母親ですから。
「そして それらが 彼女の目の前に提示されたら 130
「彼女は すぐに それらを 自分の子供たちだと 認めるでしょう。」

「そこで 閣下にもお告げください。私は 個人的に
「閣下がなされるのと同じことをやって それで誇りに思いますよと。
「我が学識ある友人よ。それが全てでは ありませんぞ。
「ここで 私たちのお付き合いが終わる訳でも ありません。 135
「私の軽馬車と 召使いたちが 門のところで
「きちんと整列して あなたを待っています。
「そこで あなたもお出かけになり 私の田舎での
「ちょっとしたおもてなしを ご覧下さい。
「それで ここ2, 3日間は 私たちは 140
「活発な日々を送ることを 試みても良いでしょう。
「馬丁を遣^{つか}わして あなたの愛馬を連れにやらせましょう
「私の目論見を笑われて どうぞ 悩みを吹き飛ばして下さい。」
このようにして 彼らは出かけて行った。四頭の馬たちは
猛然とダッシュして 約束の土地に向かって行った。 145
シンタックスが最初に 素朴な身の上話をしたのだが
今度は 郷士が 彼の栄光の物語を 詳しく語った。

_____氏

「さて 私たちは 4頭立て馬車で 遠くに来ましたが
「私は 今は 少なくとも 一人の
「商人ではなく このように 隠遁しては 150
「田舎の郷士として 楽しんでいる次第です。
「商売上の悩みを緩和する鎮痛剤を
「私が どのように準備しているか お目にかけましょう。
「ある者は 学問の向上を 突き進みますが
「私は 競馬^{けいばうま}の方が 好みであります。 155
「ある者は ^{アンビション}野心の高みへと登って行きますが
「私は 競馬のコースへの興味のほうが 強く湧いてきます。
「学問においては 私は 遠くへはさ迷いません

「私の学問は 競馬のカレンダーを調べることです。
「紋章官が 鋭い目つきで 160
「先祖からの 長く血を引く家系図を調べ
「私にも ある馬の血統を 教えてくれるのです。
「他の馬たちは また ある力強い位置を 自慢するのですが。
「しかし 私に まず決勝点に 近づけさせてください。
「赤子の馬たちと戯れるのも 楽しいことですが 165
「私は 是非とも フィリーの勝利の嘶き^{いみな}を聞きたいものです。
「あなた様は 知恵や才能のある人たち
「また 深い学問と 技芸のある人たちのことを話題にされますが
「私には 知識ある人を出し抜くような
「そんな学問を お与えください。 170
「そして 海外から ^{テスト}趣味なるものが運んでくる
「絵画とか その種のものに関してですが
「私の目には よちよち歩きの子馬を傍らに携えて
「まさに 母親らしい気品を示す 種牝馬のほうが
「勝利凱旋の戦車に乗る英雄や 175
「猪に傷つけられた かのアドニスを悲しむ
「海で生まれたヴィーナスよりも 遥かに心地よく思われます。」

シントックス

「それらの点については 私には 議論出来ません。
「ペガサス以外に 私は 馬を知りませんので。」

_____氏

「彼から 翼を切り取りなされ。私は 180
「ビーコン競馬場に 彼をも凌ぐ馬を持っていますよ。
「彼には アポロが跨るでしょうが
「私は 私の馬に賭けています。私が その馬に跨るのですから。」

こう 彼が喋っている間に 一列の木立が
 目に見えてきた。その生涯を 風に晒された木々ー 185
 少なくとも その生涯の半分の時間は
 大聖堂の長い側廊となっている木立を形成してきた 木々が
 視界を占領し この郷土の華やかなる住居へと連なる
 道路を くっきりと記しづけていた。
 そうして その堂々たる大広間が ほどなく 190
 博士を 歓迎すべき客人として 迎え入れた。
 夕餉の時間となり 目も彩なるご馳走が現れ
 牧師は 以前そうであったと同じように
 すべてを平らげることに 余念がなかった。
 以前 2回ほど招待された宴会での場合と同じように 195
 ケーキにむしゃぶりつき 酒をがぶ飲みし
 身の上話をし 貴婦人たちは 笑いこけた。
 そして このような 愉快的時間が過ぎ去ると
 ナイト・キャップとスリッパが
 博士に 準備された。 200
 そうして 馨しい一夜の眠りが終わると
 朝が 以前と同じように 微笑んでいた。
 そして 我らの心配や苦悩を知らずげに
 再び 微笑むことを 怠らなかったのだ。
 シntaxは 夕餉の食卓の時と同じように 205
 朝食の席においても 有能ぶりを示したあと
 礼儀正しく お暇乞いを願い
 心に抱いている旅行を続けなければならないと 語った。
 「そうですか」郷土は言う。「あなたが ここを去られる前に
 「私の競馬馬の仲間たちをお見せしましょう。」 210
 そこで 彼らは戸外に出る。^{うまや}厩へと足を運び
 彼は 居並ぶ駒たちを紹介し 彼らそれぞれを 名前で呼んだ。

彼らの美しさを紹介し 生まれを詳述し
獲得した名声と 彼らの黄金の価値を賞賛した。

彼らが これまでやってきた 数々の芸当や 215
負けたり勝ったりした際の 賞牌などを 褒めたたえた。
そうしているうちに シントックスは 哀れなグリズルが
藁のなかで 腹帯を付けられているのを見て 仰天した。
シントックスは言う。「あれは 私の馬でございますが。
「彼女の血統については 詳述出来ませんが 220
「何を勝ち取ったのかは 確実に語ることが出来ますー
「フランス人の剣が傷つけた その傷のことです。
「彼女の値段がどれくらいなのか 自慢げに言うことは出来ませんが
「あなたにも 彼女が失ったものを見ることは出来ますよね。」
郷士は言う。「彼女の耳はどこに？」 225
シントックスは言う。「あなたは 銕を尋ねるべきですな。
「恐らく 今頃は 彼女のしなやかな尻尾は
「どこかの納屋の扉に 釘にかけられ ぶら下がっていることでしょう。」
それから 博士は 哀れなグリズルの性格と
その運命を 語り始めた。 230
「彼女の母親が誰なのか また父親は一
「そんなこと気にもなりません」と 陽気に郷士は言った。
「よく分かるのは 彼女の高貴な夫に誰がなるのかであり
「あなたも それを知って頂く必要があるでしょうね。
「ほれ 向こうにいる アラビア生まれの評判の高い馬 235
「計り知れぬ価値を持った 貴族然とした駒のことです。」
「縁組ですか それは実に素晴らしいことですな」
シントックスは言う。「しかし それは成功しないでしょうね。
「私の家庭では 掛け合わせなどやったことはないですし
「愛するドロシーと私は 240
「子孫を増やしてやったことなども ありません。

「私たちの財産は もっと賢明に切りつめられています。
「彼女が赤子を産めば 子供たちは飢え死にしていたに違いありません。
「自分自身たちを維持してゆくことさえ 殆ど知らない私たちが
「そんな腕白子供たちを どうやって養ってゆけばいいのでしょうか。」 245
「もう お話は結構です」郷士は答える。
「今直ちに 計画を実行に移しましょう。
「グリズルを マッチェム²⁴の花嫁にしましょうよ。
「あなたは 大変誉れ高いお方であるし
「学識の深さにおいても 名高いお方でしょうが 250
「このような事柄に関しては 失礼ながら 疎いお方です。
「若い馬が誕生すれば 100 ポンドは固いはずぞ。
「私の気まぐれならば お許しを。ただ 実行に移しましょうよ。」
そういう訳で その朝 グリズルは 結婚した。

今や 郷士は シンタックスに 255
もう一日の滞在延期を 申し出る。
「あなたの馬は」彼は言う。「ロンドン行き荷馬車の端っこに結びつけて
「先のほうまで 送り届けましょう。
「そして 彼女が40 マイルかそこらに達したら
「私たちの4頭立て馬車で ついて行きましょう。 260
「そして 道路の途中にあるダン・カウ亭で
「グリズルは 安全に 収容されるでしょう。
「そうして 尊師様 遅かれ早かれ
「彼女は 主人のご来着を 待つことになるでしょう。
「あなたも 時間と場所を見失うこともないのです。 265
「私は 私自身の 名高い競馬馬を飼っている

²⁴ 原文はイタリックで “Match'em” と書かれている。勿論、牡馬の名前だが、「彼らを結婚させる」という意味を兼ね合わせた言葉遊びとなっている。

「コースへと 赴きます。

「もしも あなたが この娯楽に関心がありませぬならば

「どうぞ 町の方へと 赴いてください。

「あなたのご苦勞を 誉れと利益が 有終の美で飾るよう

270

「心から 願っております。

「で 明日には その日が暮れるまでに

「道中を歩くグリズルに 出会えるでしょう。」

「どうぞ お気に召されるがままに」と 博士は言う。

「あなたのご親切なお導きに 私は 従いましょう。

275

「私自身 気高い心の人たち 愛撫された心地で

「途轍もなく 祝福された気持ちです。

「あなたが与えてくださる 親切なお引き立てが

「私の心に 歡喜の油を 雨と降らせている感じです。」

さて 貴婦人たちは 博士が描いた

280

旅の絵と 物語を 見聞きしたく願った。

彼は 書物を見せたのだが それは この親切な

美しい女性たちに 献金する気にさせる誘惑物となった。

そして 彼女たちが 博士の財産を増やすことに

物惜しみしない質の 喜びを感じているあいだ

285

郷土は この冗談を 活かし続けておくべく

彼の厩^{うまや}の係りの者たちに 工夫するよう命令していた—

善良な博士の 灰色の毛の馬が

運搬人の配慮に委ねられる前に—

彼女が 航海に出かける前に—

290

彼女に 耳と尻尾をあてがう工夫を。

で 彼女は 数週間前に そうではなかったように

もやは 刈り込み頭では なくなっていた。

そして また ほどなく 彼女の脚は

臀部の名誉をすべて 感じるようになっていた。 295

このようにして 彼女は 特殊な技芸によって装備されて
運搬人の 荷馬車の後ろを 歩いていた。

次の日 朝食を済ませると

郷土とシンタックスは 弾む足取りで 飛びだして行った。

そして 夕方 太陽が沈む前に 300

ダン・カウ亭²⁵が この賢者を迎え入れた

そこには グリズルが 彼女の旅を終えて

少し前に 既に 到着していた。

さて シンタックスは 台所の暖炉のそばで

パイプを吹かしたい 強い欲望に駆られた。 305

そこには 多くの田舎人たちが 腰を下ろしていて

博士も そのお喋りに加わずにはおられなかった。

そうして スープを啜り ビールを飲み

沈黙が あたりを支配すると思われたときに

彼は ゆっくりと ポケットから 310

己れの旅行用メモ帖を 取り出した。

そして そのページをめくりながら

興味深い教訓を 思い巡らしているときに

この村の正当な知恵者である 税収税吏が

(というのも 彼は 預金高を計算し判定出来る人だったゆえ) 315

他の者たちの代わりに 話をした— そして 彼らは

この牧師が 大声で読み上げるのを誇りに思い 耳を傾けようとした。

彼は承認の会釈をし 直ちに 語り始めた—

人間には 何たる美が 内在していることか。

また 美は この大地の表面にあり 320

²⁵ 原語は“The Dun Cow”と書かれている。文字通りには<「月毛の雌牛」亭>となるか。

また 大地の内臓のなかで 誕生するものたちのなかであり
また それぞれに程度は違うのだが それなりに
空中に住む者や 海を愛する者たちと共にあるということ。
また 美は 成長する樹木や植物すべてのなかに
咲いている様々な花たちすべてのなかにあるということ。 325
感覚のない者たち 生きた生き物たちに関わらず
自然の領域にある 全ての物のなかにあること。
手短に言えば 彼は 下界の広大な広がりを通して
事物の様々なに変化する状態を 1点に集約するものから
美の 多様性に富んだ形体が出現することを 330
明言するために こうして 示したのであった。
しかしながら 彼が たっぷりと気品あふれて 読みあげているときに
力強い表情が 彼の顔を刻んでいたけれど
また 彼の足は 音を立てて響く床を 打ち付け
彼の声は 扉越しに 雷鳴のように轟いたのだけれど 335
聞いている者たちは全て まるで 麻痺した感覚が
伝染するかのように 無意識のうちに眠りこけていた。
ある者は パイプを落とし ある者は ^{いびき} 鼾をかき
檜の木のテーブルは 綿毛のベッドとなり
靴直し屋は 欠伸をし そして 休息へと沈み込んだ 340
彼の顎を 胸までに傾けながら。
トムとスウ以外のものは すべてがすぐに 寝込んでしまった—
この二人は 他の仕事をやっていたゆえに。
シntaxは 何も聞かなかった。この恍惚となった腕白屋は
己れ以外に 何も見ず 何も聞いていなかったのだ。 345
しかし ある豚飼いの角笛が鳴り響いた時に
その時に 博士は 仰天し 困惑しながら
己れの周りの 死のような光景を目にした。
そして それが 自分を嘲るよう仕組まれていると思い



彼は 軽蔑の渋面を浮かべて それから頭を殴り
蝋燭を捉えて そして ベッドへと急いだ。

350

第二十一曲

有徳の者には 常に優しい眠りが
やがて 博士の騒ぐ心を 鎮めてくれた
そして 朝が その露を注ぐとき
彼は 起き上がり 旅を続ける準備をした。
お茶とパンを たっぷりと 腹に押し込み
宿主に 請求書を持参するよう 依頼した。
しかし それを見たときに そこに
奇妙な項目があるのを見て 目を疑った。

5

「あなたの馬丁殿に ここに来るよう伝えてくれないか。
「彼と ここで会って話をしたいのだがね。」

10

馬丁は 今や 彼の前に立っており
会釈をし そうして 両手をこすっていた。

「この請求書だがね 我が友よ きみは

「ちょっとだけ 私の馬と私に関して冗談が利きすぎてるよ。

「きみの小麦と 豆と 干草に関しては 15
「公正な請求で それについては すぐに支払うよ。
「しかし ここに 奇妙な請求項目が 書かれているね。
「<彼女の尻尾と耳の掃除代>なんて。
「いいかね きみ。もし これが 私に対して
「きみ自身の野卑な戯れ心から 成されたのだとしたら 20
「(私の馬には 耳も尻尾も無いのだからね)
「私は この馬を打つための鞭を振って 怒りに任せて
「きみの背中で あらゆる角度から この鞭を弾けさせようとも思うのだ。」
その男は ^{わるだく}悪巧みなど 全然なかったと告げる。
彼には この牧師が 何を言いたいのかわからない。 25
そこで ここでは何も言わずに グリズルを
扉まで連れてくるのが最善と考えた。
彼女の耳は 塗られた粗布で出来ており
彼女の脚の上には 一本の尻尾が現れているではないか。
そんなにも 彼女は変身しており 華やかで小奇麗で 30
余りに技工を凝らして 飾り立てられていたので
シntax自身でさえ この変身した牝馬を
自分のものだと主張することが出来ない程であった。
彼は 何も言わなかった。ただし この冗談が
粗悪な人種の戯れではないことを 知ったのだった。 35
そうして 馬上の人となり 痛快さを増すために
優しく その微笑みを 辺りに投げかけていた。

こうして 旅を続けながら
厳かなる気分で 突然 こう語りだした。
「そろそろ 故郷の人間たちが 私の放浪が止み 40
「帰宅するのを待つ時が近づいているけれども
「それと 同じくらい重要な目的も

「決して 忘れていたわけでもないけれど
 「それでも 今日 人間にも動物にも
 「両方共に指定された休息の日であるからには 45
 「最初に出くわす教会に赴いて
 「そこで 私の厳肅なる努めを果たすことにしよう。」

こう独り言を言っている矢先に 村の鐘が
 礼拝の時間であることを告げていた。
 すると すぐに 赤ら顔の副祭司がやって来たので 50
 博士は 重々しく 己れの名前と 立場と
 文学上での名声について 彼に話した。
 そして 自分は 長いこと教育に携わって来たので
 30分程 説教をしてよろしいかと 彼に尋ねる。
 この提言は 微笑みを持って 受け入れられ 55
 二人は 側廊を ゆったりと歩いて行く。
 それから 時間通りに また 適切なる優雅さを持って
 シンタックスは いわば<説教顔>を 取り繕った。
 幾分しゃがれ声だったが それでも厳肅な声でもって
 彼は 次のような説教の訓話を施した。 60

「今から 私が復唱します主題は
 「ヨブ記の第5章第7節であります。」

“As sparks rise upwards to the sky,
 “So man is born to misery.”

人の生まれて^{なやみ}艱難をうくるは
 火の子の上に飛ぶがごとし^{かみ} 26

26 日本聖書教会『舊約聖書』より転載。

「これが 私たちに理解できる 一つの真実であります 65
「いかなる状況にあれ 私たちは それを十分に 理解しているはずです。
「揺り籠にいる幼子は
「泣きながら 悲しみを記しづけます。
「彼の幼い目から 水が流れ出しますが
「それは 彼の将来の悲哀の エンブレム 象徴です。 70
「彼の頬は 変化に富んだ四月の一日を特徴づけるような
「様々に変化する光景を 展開します。
「喜悦と希望の シンボル 象徴も 現れますが
「あるときは 微笑みが そして 別の時には 涙が 現れるのです。



「泣き喚く幼年時代が終われば 75
「乳母の配慮も 彼は 失ってしまいます。
「学問的な訓練に委ねられて
「家庭教師が 彼の若い日の精神を形成します。
「そして 希望と恐怖が 交代交代に 立ち上がってきます—
「しかも その都度 奇妙な変化を示しながら。 80

「そして 拘束されるのを嫌がって 幾度
「彼の声が 大きな不満の叫びを 上げることでしょ。う。
「一方で 厳格なる矯正を意図する強力な法律が
「若い腕白な心を 畏怖の念で拘束します
「すると 黒い雲が 永遠に 彼の上に立ち込めて 85
「その輝くような快活な歳月を ^{かげ} 翳らせてしまうのです。
「同時に 公正な^{リーズン}理性が放つ着実な光線が
「^{ライフ}人生の初期の日々を明るく照らす時には
「それが 即座に 暑く^{かぶ}被さる霧を払いのけるのですが
「だからと言って 涙の源泉を乾かしてしまうという訳には参りません。 90
「と言いますよりも 皆さんをご存知のように
「時々 涙を流させるのが その努めなのです。
「さて 次には ^{パッション}情熱が 無意識の心に
「その衝動を 波及させ
「^{ユース}青春の嵐の如き生の歳月に 混ざり合いながら 95
「刺と花の両方を 植え付けるでしょう。
「他方で ^{ファンシー}空想は 様々な装いを纏いながら
「無数の色で染められた翼をつけて
「気まぐれに戯れ 彼の心の周囲を飛び交っては
「重々しい思考を 一つ一つ 運び去るのです。 100
「また ^{プレジャー}快楽は その華やかで 幻惑させる従者の群れに加わり
「呑気な心の人間たちに求愛しながら 理性の道と
「^{ウイズダム}知恵の道から 彼らを突き放そうと試みるのだが
「ほとんどの場合 その試みにも 失敗はしない。

「そして ああ 如何にしばしば 諸感覚は 105
「快楽の極みと呼ばれるのものに 飽き飽きさせられることか。
「そうして 青ざめた^{リペンタンス}後悔が 最後に訪れて
「過ぎ去った快楽に 呪いの言葉を浴びせるのだ。

「—— そして最後には 完成した成人となり
「世界は 彼を 己れのものとして 受け入れる。 110
「この成熟した歳月の一瞬一瞬を
「人生の活発で忙しげな光景が 占領し
「**快楽**が 彼を 花々の下に**毒蛇**が潜んでいる サーペント
「そのような 自らの東屋へと誘惑する。
「**野心**が 彼を誘惑し アンビション 115
「勇敢な魂が飛翔する大空を 探求させる。
「他方で 死すべき人間のあるゆる計画と混ざり合い
「その人間の最大の関心事である**富**が ウェルス
「煌く金属を 突きつけるのだ。
「かくして **快楽**と**富** 或いは**力**への**愛**が 短いものであれ パワー 120
「長いものであれ 人間の持ち時間を利用しているのである。」

「若い日 ないし 大人の初期の日々には
「最初に 快楽が 道中の彼に遭遇する。
「**サイレン**²⁷ が 歌を歌い聞き惚れる彼の耳は
「余りに甘いその歌声を 飲み込んでしまうのだ。 125
「その甘美な歌声の奴隷となっては
「彼は 己れの船を 波に委ねる。
「進みゆくにつれて 舵も見捨てられ
「雷光が空を引き裂き **旋風**が 吹き荒れる。 つむじかぜ
「その際に 激怒する嵐に揺さぶられ 130
「陽気な 飾り立てられた小舟が 見失われる。
「しかし 大海の怒号のなかで

²⁷ 原語は“Siren”: (ギリシャ神話) サイレン、セイレン (Sicily 島近くの小島に住んでいたとされる半人半鳥の海の精; 彼女らの歌を聞いた船員はその美声に魅せられて海に飛び込んで死んだという。 (『新英和大辞典』)

「もし 彼が ある遠くの岸辺に打ち上げられるとしたら
「そんな時には その寂しい岸辺を放浪しながら
「彼は 無くしたものを思い 溜息をつくだらう。 135
「つまり 天が 彼の若き日の願いに応えて与えていた
「健康と 安らかな生と 凡ゆる喜びなどを 失ったのだ。
「しかし 人生は尚も彼のもの。 しかし 人生そのものは
「過去の愚行の償いをしてはくれず
「^{ペイン}苦痛が襲い掛かり ^{ホープ}希望は飛び去ってしまうのだ。 140
「彼は 微笑む歳月と 栄えていた日々の
「太陽光線を もはや 感じることは出来ず
「世界は 彼に顔を背け 悲哀と苦悩の
「その人物を 知ることさえないだろう。
「世界は 彼に ある地下室へと行くように命じ 145
「そこで^{コントリション}悔 悛の機会を持つよう 希望する。」

「また 野心であるが 野心も さほど安全ではない
「また 彼らが耐える諸悪も また然りである。
「その野心の胸のなかには かの天使たちが
「それゆえに墮落した悪徳が住み着いているのが 見られる。 150
「支配への愛 権力への熱望などは
「決して 平和で静謐な時間を齎すことはありえない。
「それは 気が狂うように 至高の支配力を求める
「魂の持つ激烈な熱病なのだ。
「そこでは 燃えるような乾きが 常に 育ち行き 155
「^{プライド}誇りも 永続する喜びを 知ることがない。
「そうして ^{ヘイトレッド エンヴィー}憎悪 嫉妬 そして警戒する^{フィア}恐怖が
「誇りに満ちた 大胆な人生行路に 付き纏う。
「また 闘争が 凡ゆる営みに 付き従い
「今の友が敵になり 今の敵が 友になる。 160

エンジョイメント

「**娯楽**が 新たな欲望に生命を与え

「**希望**が 永遠に その火を扇子で扇ぐ。

「より低い高みが 征服されるたびに

「より高い峰が 常に 待ち構えている。

「そして それから 目は 他人の目がそこに 165

「発見される望みを抱いて 鋭く周囲を見回す。

「つまり その人の聳えるような高みが 全体を仕上げるような

「そのような人の 熱い志を持った魂のことを言っているのだが。

「しかしながら しばしば この熱い魂は

「己れの労苦と苦悩の目的を 達成するのだが 170

「目眩を起こすような光景が 彼の五感を 威圧する。

「何か親切なる援助を求めても 多分 無駄である。

「誠実心のない友が 侮蔑する敵が

「彼が 下方の奈落に真逆さまに落ちるとき

「ただ 喜ぶだけなのだ。彼は ^{ライ}虚偽の餌食となり 175

「歯を剥きだして笑う ^{スコーション インファミー}軽蔑と醜聞の餌食となった。」

「次には ^{リッチ}豊かさが 我らの思いを要求する。

「しかし 黄金は 余りに高い代価を要求する。

「凡ゆる風土 凡ゆる土壌において

「それは 全てに関わる労苦を 目覚ましめる。 180

「黄金のために 健康と安らかさを平然と無視しながら

「船乗りは 遠くの海に 鋤を入れ

「これは 富と名声を求めて戦う兵士の

「大胆な目標と 合致する。

「しかしながら 万人が 黄金の力を身につけることを願うけれど 185

「それが 幾多の悩みの諸起源となるのは 言うまでもないことなのだ。

「人間の胸に宿って その周辺を感染してしまう

「凡ゆる悪徳のなかで

「マモン²⁸への愛こそが 最悪のものであり
 「最も忌み嫌われべき また最も呪われるべき悪なのだ。 190
 「^{プレジャー}愉悦の華やかなる瞬間は 人間の心に
 「ある喜びを 齎すことは有り得る。
 「また 野心も ある気高い魂の
 「同居人であることが あるかもしれない。
 「しかしながら 豊かさへの愛は 常に 195
 「最も低次の^{ケア}配慮という そんな印を帯びている。
 「我らは ^{アヴァリス}貪欲という青ざめた形体のなかに
 「常に変わらぬ 一つの^{ヴァイス}悪徳の姿を確認する。
 「それは 既に与えられている蓄えを ただ増やすために
 「その祈りを 天に向けて 送り出すのだ。 200
 「また 貪欲は 受けた賜物があっても それに報いることもしない—
 「^{ウオント}欠乏ゆえに パンのかけらさえ見いだせない
 「風雨に晒された小屋の上に
 「一本の 優しい 元気づける光線を注ぐでもなく
 「また 未亡人の目から 205
 「悲惨さゆえに溢れる涙を 拭ってやることもしないし
 「また 着るものもない身体に対して
 「暖かく保つべき衣服をあたえることも しないのだ。
 「それを 黄金に求愛し 眠れない夜を過ごし
 「夜が明ければ 終日 あくせくと動き回る。 210
 「いいや これだけではあるまい。冷酷な欺き
 「反逆に満ちた心 背後に隠された裏切り
 「準備された詭弁 過酷なる要求
 「そして法律の威圧的で 手を離さない拘束—
 「それらの^{悪魔}悪魔たちが 必ずや マモンの 215

²⁸ 原語は“Mammon”: 富の邪神、マモン神（物欲の擬人的偶像）（『新英和大辞典』）

「暗い 荒涼たる門で 待ち構えているのだ。
「彼は 何を愛しているか。きみに 告げることが出来るか。
「私には告げることが出来る。彼は 己れの黄金を愛しているのだ。
「彼は その一つの言葉遣いのなかに 親族と
「隣人と 友人たちを 包み込んでしまう。 220
「しかし **運命の女神**が 仮に 毎日 彼の蓄えを
「豊かにしようとして 彼女の財宝を注ぎ出すとした場合
「彼は 幸せなのか。彼は 敢えて表情に出したくなるような
「そんな快楽を 感じるのだろうか。
「いや そんなことはありえない。不安で打ち震える心臓が 225
「絶え間ない疑いと恐怖を与え 彼を苦しめる。
ジャステイス
「**正義**が 未亡人の権利を要求し
「彼が行った数々の不正を
「襟を正しながら 償うべく
「法廷に姿を現し 230
「孤児の涙に答えるよう 命じるときに
「見たまえ 彼が 如何に戦慄に 打ち震うのかを。
「いやはや 更に悪しき 過酷なる運命が
「未来の時間をも 悪化させてしまうだろう。
「外なる笞刑 内なる笞刑が 235
「無益な罪を 懲らしめるのかもしれない。
「結局 苦役と悩みの後に
ディスペア
「彼が **絶望**を逃れるならば それでよしとしておこう。」

「しかし **快楽**が 健康が失われ 幸運も消え去ったときに
「それらの喪失によっても 妨害されない時でさえ 240
「悲しいことに それは 背後に虚空を残す
「そして 倦怠感が 心を脱去させる。
「**愉悦**の季節が過ぎ去れば

「その亡霊は もはや 喜びを与えることは出来ない。

「その時は短く 即座に過ぎ去る。

245

「春の花々も 永続するために咲くのではないのだ。

「何が 最も長い運命を提示するのかを 言ってみたまえ。

「一本の花と 一つの熱病と 一つの墓。」

「野心は 人生の究極の しかし短命の時間にのみ

「その権力を揮うのではあるけれど

250

「では その最も高揚した際の喜びも

「ある卑しい不純物に 纏まとい付かれているのではないか。

「そして その最も誇れる そして最も高い場所にいても

「野心は 常に 愉悅を見出すと 言えるだろうか。

「それは 恐怖の襲撃や 羨望エンザウの矢から

255

「その心を 防衛してくれるのだろうか。

「それは 過ぎ行く人生の 死すべき定めから

「目を逸らしても その目を閉ざすことは出来ないのだ。

「高みを憧れる その額から

「野心は 下方に横たわる墓を見るに違いない。」

260

「なる程 富ウエルスは 公正な追求によって たまたま

「獲得され また 名誉をも与えられるかもしれないが

「しかし その従者のなかに 如何にしばしば

「悲惨さを示す 青ざめた形体を 見ることだろう。

「不摂生インテンペランスが 邪悪な快樂を供給し

265

「醜悪な食欲を 煽り立てる。

「他方で 贅沢ラグジャリーは それこそ無数のやり方で

「肉感的な不養生に対して

「徐々に身体を蝕んでゆく病の炎を露呈しては

「死すべき肉体のなかで その火を煽るのだ。

270

フォーチュン

「**幸運**も 気な気分を抱いて 顔を顰めるかもしれぬ。

「その堅固な基盤も 崩れ落ちてしまうかも。

「**幸運**は 安定した強さのなかに 現れる一方で

「それは 失墜し 遂にはその所有者を 貧しくしてしまう。

「蓄えられた富の 比類なき山も

275

「衰えゆく健康を 回復させることは出来ない。

「それらは 太陽に賄賂を与えて 留まらせたり

「また その燃える光線を 和らげたりすることは出来ぬ。

「また ^{ザ・ノース}**北風**の横柄な冷たさも 黄金のために

「快適な暖かさへと 溶解することはない。

280

「**時間**は 数百万の人間たちが 彼の進む道を横切るが

「ほんの一瞬感たりとも 立ち止まってはくれないのだ。

「クロイソス²⁹が所有した黄金のすべてでもってしても

「この人生に 更なる一瞬を 付け加えることは出来ない。

「王室の宮殿も 田舎家も

285

「一つの共通した法則のもとに置かれている。

「富者も貧者も 小さき者も 偉大な者も

「一様に 運命の一撃を感じなければならないのだ。

「私たちが知るべきは **美徳**のみが

「この下界における 真実の幸福であるということなのだ。

290

「そしてまた 彼女の優しさは 苦役と苦痛によって

「愛する子供を いかに 試練に晒すものかを。

「高貴な精神のなかの花とも言うべき ^{オナー}**名誉**は

「しばしば ^{トレチヤリー}**反逆**の力によって 欺かれる。

「そして 慈善は 卑しい偽善の盲従者により

295

「欺かれるということを 私たちは しばしば目にする。」

²⁹ 原語は“Croesus”:「クロイソス: Lydiaの最後の王(560-546B.C.)、一般に<大金持ち>(『ランダムハウス英和』)

「人間は 誤って 悲哀の嫡子と名付けられたと
「敢えて 宣言する勇気のある者がいるだろうか。
「しかしながら 兄弟たちよ。私たちが 悩みと苦悩の この
「割り当てられた条件を 支持している時に 天は不正であると 300
「様に嘆くことは 止めにしようではないか。
「私たちの人生は そのような鋳型に合わせて 作られていて
「永続するようには作られてはいない—それは明白なことなのだ。
「人生とは 通過儀式であって 純度の高い天球層へと
「迎え入れられるための 試練の場なのだ。 305
「あの別世界に存在し
「より良い世界 より輝き豊かな大空に存在する
「一つの賞与を求めての 戦いの場所なのだ。
「この世では 苦痛を耐えるべく 運命づけられてはいるけれど
「我らの幸福は 実に あそこに蓄えられている。 310
「人生の悲哀と戦い
「悪に立ち向かい 絶え間なく争い
「情熱が沸き上がれば その熱を抑え
「その狂乱する性癖を抑止し
「己れの本性を改善し 忍耐強く 315
「人間的な哀しみの 割り当てられた分担分を
「耐え抜きながら そうして 死すべき者のため そして
「不滅の者のために 壮麗な 不可思議な計画を
「練り上げておられる かの 賢明で
「永遠なるご意志を 満たすこと。それが 人生なのだ。」 320

「人間は 実際に 神のご天命により
「幸福な存在であり また そうあらねばならない存在なのだ。
「憊いなき 虚弱な そして 有限の生き物として
「自らの立場に応じ また 本性に応じた 幸福を充てがわれている。

「自れの仕事を果たし 自らの労働が終われば 325
「悪と悲哀は もはや 存在しない。
「そうして 死の谷間を通り抜けた後は
「彼は 萎れることのない花輪を 我が物として主張する。
「それは ^{チェラブ} 智天使が歌い ^{エンジェル} 天使たちが身につけるような
「人間が 共に分かち持つべき 永遠なる ^{グロリー} 栄光の冠なのだ。 330
「そうして 神の驚嘆すべき計画は 成就し
「死すべき者も 不滅のものになるのである。

ここで シntaxは 説教を終えるのが相応しいと判断する。
感嘆しながら会衆は 立ち上がる。
しばらく フム・フムとかハア・ハアとか言いながら 335
郷土は 喝采を伝える意味で 深く頷いて見せた。
というより 居眠りもせず 躰をかくこともしない
聖なる天の使者^{ミンスター・オブ・ヘヴン}に対するような
そのような存在に 注意を払ったのであった—
これまで 知られなかった質の 一つの驚異であった。 340
そうして 会衆席から 歩み出ると
博士に 感謝の気持ちを伝えに近寄った。
「尊師様 あなたのご説教は 美しく立派なものですので
「あなたが 偉大な聖者であることを 証しています。
「それに引き換え 悲しいかな 私は 罪人に過ぎません。 345
「どうぞ 私と一緒に 夕食をとりいらっしやいませんか。
「そして 我が家 タベの祈りが済んだ後で
「副祭司様も あなたにお目にかかりにおいでになるでしょう。」
博士は この屋敷が 豊かなもので詰め込まれているのを見た。
お話好きの奥方がいて 食卓にはご馳走が山となつて— 350
夕食は 目をも楽しませるものであった。
そして 説教とは 食欲を増大させるものでもある。

シントックスは 法衣がなすべき仕事の何にもひけをとらず
目と胃袋両方を 実演することが出来たのであった。

遂に 食料が片付けられ

355

郷士は 己れのお気に入りの話を 語り始めた。

郷士

「尊師様は 故郷では 狩りはなさいますか」

シントックス

「それに対する答えは 殆ど できませんな。

「私は狩りをしたこともなく また鉄砲を持ったこともありません。

「私には時間がないし そのような余興を好むものでもないのです。

360

「学問が 私の追求する狩猟です。

「その他 いかなるスポーツも 私の頭には存在しません。

「尤も 聞いたことはありますぞ。周囲の田舎路は

「野兎のうさぎと 鶉うずらが 溢れていると。

「勿論 私の食卓に 前者か後者が乗っかっているなど

365

「稀まれだし 実際 殆ど見ることはないのですが。

「しばしば 私が 早朝に起き上がって

「快活な角笛が 木霊するのを聞くときは

「その鼓舞するような騒音によって

「怠惰な子供たちの群を<狩り>に行かざるを得ないときは ありますが。370

「そして 彼らが 大騒ぎをしながら ペちゃくちゃ喋るとき

「私は 特別な<獵犬係>になるという訳です。

「そればかりでなく 彼らに何か 過ちでもあれば

「私は 責務を果たすかのように 鞭を炸裂させるのです。」

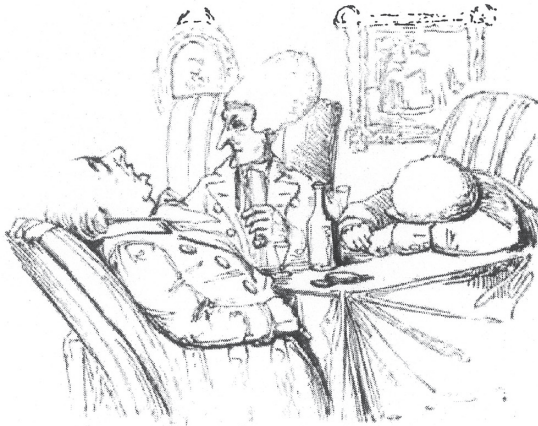
シントックスは 身の上話を語り終えたが

375

それは これまで幾度となく 語った話であった。

そうするうちに 郷士には 睡魔が
彼の五感のうえに 忍び寄るのを感じた。
副祭司も また ビールに酔わされて
聞くよりは 眠る方に 心を奪われていた。
シタックスは言う。「飲み物の効果を 見よ。
「天よ 思考力を失った魂たちを どうかお許しあれ。
「でも 私も 彼らの眠りを邪魔してはならないだろう
「<安息日>とは 休息の日なのだから。」

380



たちまち 彼の言葉も支配力を失い
また 今や 彼に耳を傾ける者もいなくなった。
彼は もう一度 パイプをとって煙草を吸おうとしたが
彼の冗談を聴く者は もはや いないのだった。
そこで 彼は 肩肘をついて
眠れる一行の 仲間入りをした。
彼らが目を覚ました時に 時計は十時を打ったが
その時の甲高い音が 彼らの眠りを壊したのだ。
そのような調子でことは進み

385

390

シンタックスは 我が家にいるかのごとく 安らいだ。
こうして 大きな^{あくび}欠伸をし 各々 頭を揺らしながら
お休みを言い合って それぞれのベッドについた。

[2016 (平成 28) 年 4 月 30 日・訳了]